
魔法少女リリカルなのは～未来の守護機士

ぱむ～ん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 未来の守護機士

【Nコード】

N5299P

【作者名】

ぱむん

【あらすじ】

ジェイル・スカリエッティは諦めていなかった。

数十年と言う歳月の果て、彼は脱獄し、復讐を誓う。そして彼は完成させた。

完璧な戦闘機人と、時を遡る機械を……

「さあ、過去に行き、私の邪魔者を消して来い！」

戦闘機人は過去に送られた、しかし……

起動記録01（前書き）

初めての人は始めまして、見た事がある人はこんにちわ、ばむぐんで御座います。

他に幾つも連載を書いているのですが、衝動が抑えられずに新しく書き始めました。

更新に関してはローテーションで行くので一週間に一回書けたら良い方です。

それでは拙い文ですが、お楽しみください。

起動記録01

青年は願った……誰も守れる力が欲しいと……

そして青年の渴望に答えるように老人は青年に手を伸ばす。

「力が欲しいかい？」

「本当に誰も守れる力が手に入るんですか？」

「勿論……」

青年はその手を取った……これから施される処置で自分が死んでしまつと知りながら、それでも跳ね除ける事が出来なかった……

『皆を守りたい……』

彼は最後に映つた老人の狂気に満ちた笑みを見ながら、同じ事をずつと思ひながらその生涯を遂げた……

「まだ終わりじゃない、くくっ」

ボロボロの白衣を纏った男があるカプセルを見つめながら狂気に満

ちた笑みを浮かべている。

「あの事件では不覚を取ってしまったが、より簡単に私の夢をかなえる方法があつたじゃないか……」

カプセルの中の若い姿の男を見つめながらキーを叩き続ける。

「そう……邪魔をした彼女達を……過去の世界に行き消せば良い！
！この戦闘機人の手によつて！」

彼は長い年月を掛けて、遂に時間を越える機械を完成させていた。
しかしその機械には肉体を送り込めないと言う致命的な欠陥が存在した。

彼は其れすらも送り込み人材によつてクリアをした。
その人材として用意された彼の赤い瞳が開かれ、機械らしく赤々と光を放っていた。

やっと手に入れた最高の素材。
数多の違法研究所で生み出された物の中で、最も機械との適正が高かつた彼を見つけて、老人は遂に自分が追い求める完璧の兵器を生み出した。

「さあ！行つて高町なのはを消してくるのだ！私の最高傑作よ！」

舞台役者のように手を大きく広げた白衣の男は、その瞬間だけ昔の姿が重なった。

そう次元犯罪者、ジエイル・スカリエツィの姿が……

その日、鳴海に青白い光を放つ球体が降り立った。
その玉は徐々に溶けていき、その中から青いボディースーツを纏った
一人の男が出てきたのだ。

「……座標確認。……鳴海市に到着を確認」

男は独り言のように口ずさみ、周りを確認する。

「……障害なし。命令を確認する」

男の眼が一際輝き、その目の中で文字が高速で流れていく。

「……障害である最重要人物高町なのはの消去。可能であれば、フ
エイト・テストロツサ、八神はやての両名も消去」

瞳の輝きが収まり、行動を開始する。

だが其処で空から大きな魔力を感知する。

「……魔力反応を複数確認。高速で接近中、しかし敵性反応認めら
れず」

その場所を確認しようと空を見上げた時、その反応を示していた物
体が彼の体に突き刺さった。

「ガ、ガガ……該当データ、ア、リ。ロスト、ログア、ジュエル・
シード……」

敵性反応が無かった事と転移したばかりで身体が思うように動かな

かった為避け害ってしまった。
そして一際輝きが強くなり、辺りを光が包み込む。

「……………」

光が収まり彼にも怪我一つ見受けられなかった。
しかし、頭を抑えて何処か苦しそうにしている。

「命令を確認す、ル……………最重要、人、物高町なのは及び、フェイト・
テスタロツサ、八神はやての……………」

彼は苦痛が消えたのか、常と同じ機械のように感情を一切無い顔で
言葉を口にした。

「障害を消去する……………」

其れはジュエル・シードによって叶えられた僅かに残された残留思
念の願いか、それとも衝撃で回路が焼かれてしまった為の障害か、
其れは誰にもわからない……………
そして彼のメモリーに

「自分は……………誰だ……………」

三人を守るといふ歪んでしまった命令以外のことが無くなっていた。

起動記録01（後書き）

如何だったでしょうか？

一応、stsまで書く積りでの設定なのでこのような物になりました。
更新が止まってしまわない様に頑張っていきます。応援よろしくお
願います。

起動記録02(前書き)

連続投稿します。

書き溜めていた分はこれで最後です。

これから時間をかけていきます。

起動記録02

「……記憶系に多少障害が見られるが、任務達成に支障は見られ
ない」

自分という存在が何なのか、それが解らなかつた彼は自身に入つて
いる情報を確認した。

それで確認できた事は、数多の人間の魔力波長と自分に内蔵されて
いる数々の能力だつた。

自分を作つたのが誰なのか、何処から来たのかが未だ解らないが、
能力の確認が取れたことで任務に支障が出ないので一旦思考から外
した。

「任務達成の為には、人間に解け込まなくてはならない…… IS 発
動 ライアーズ マスク 偽りの仮面」

呟いた瞬間、彼の姿はまったく別人になっていた。

真面目な大学生の様な風貌に変わった彼は、服装などが変わった事
を確認した後、未だ明るく光を放っている町に向けて歩き始めた。

彼の使つた能力は未来の世界に措いて、ナンバーズ2ドゥーエが所
持していたものだ。

それを所持している理由は、スカリエツィが完璧を追い求めた結
果、彼女達の能力の全てを彼に内蔵させてしまったのである。

「高町なのはを探すのが優先事項。……データに無い為、風漬しに探す事にしよう」

彼は暗い夜の町に姿を消した。

「え？ええ！？これ何！？」

「来ます！」

今私は、とても大変な事になっています。

おかしな声に誘われて、助けたフェレットの居る病院に来たら、黒いオバケが暴れていたり、フェレットは喋りだすし、私は変身してしまったり、とにかく大変です。

「きゃっ！」

なのはは体当たりしてきた敵に対して、咄嗟に杖を前に突き出した。

すると、防御魔法が発動し、そのシールドに阻まれた敵は弾け飛び、分裂した。

「ふ、ふええ！？なんか増えちゃったよ!？」

「あれは……幾つものジュエルシードを中に蓄えてたんだ!」

彼？の言うように三つに分かれた黒いオバケの中には、それぞれ青い宝石のようなものが見える。
そして、黒いオバケ達は逃げるように跳ねて行く。

「いけない！このままだと町に要らない被害が出てしまう!」

「ど、如何すればいいの?」

「アレを全て封印するんです。その為には……」

最初に追いかける為に空の飛び方を教えてもらって、空を飛びながらフェレットに魔法の発動の仕方を教えてもらっている。
暫らく飛んでいくと、突然一体が方向を転換し、襲い掛かってきた。それを先程と同じ要領で防ぐもののそれを好機と取ったのか、他二体も体当たりをしてきた。

「う、ううっ！きゃっ！？」

数秒耐えたが、相手の重量に押されて吹き飛ばされ、壁に激突する。その衝撃で、なのはは一瞬意識を落しかけ、目の前に迫る再び一つとなった黒い物体に反応が遅れる。

まだ幼い彼女でも、それがどうしようもなく危険な事だと言う事は理解でき、戦闘等した事が無い彼女は恐ろしさから瞳を閉じた。

「魔力波長を確認。記録と魔力量が落ちているが高町なのは本人と断定」

知らない男の人の声と、今まで煩かった黒い物の音がしなくなり目を開ける。

「……あ」

するとそこに、黒いものを押さえつける知らない男の人が居た。彼がこちらを振り返り、数秒見詰めて口を開いた。

「高町なのは」

「は、はい…」

見た感じ自身の兄と同じ年くらいの男性から、フルネームで呼ばれ咄嗟に返事を返した。

「自分に封印処理を行う能力は付与されていない。これを大人しくさせるので、封印処置を依頼する」

「わ、わかりました！」

彼は手を離し、足で蹴り空に打ち上げた。

そして彼は徐に腕に手を伸ばし、その腕を肘の部分から外した。

「ふえっ！？と、取れたの！」

自由になった事で、黒い物は触手を伸ばし反撃に移ろうとするが、次の瞬間それは全て消えてなくなる。

「IS発動　へヴィバレル」

凄まじい閃光を伴って放たれた砲撃に、なのはは口を空け呆然とした。

「そんな……魔力を感じない。アレだけの砲撃を放って魔力じゃない物だつて言うのか？」

なのはの肩に乗るフェレットは有り得ない者を見る様に、彼を見詰めて続けていた。

警戒心剥き出しで、毛まで逆立っているようだ。

「高町なのは、封印を」

「はい！」

外した腕を詰め直しながら、なのはに声をかける。ガチャっと言う何かが増まる音を聞きながら、それに返事を返して、すぐに封印処理を行った。

桃色の魔力光で当たりを照らしながら、徐々に黒い塊は小さくなり、やがて塵となって消え去った。

「お、終わったの……」

初めての魔法使用、初めての戦い、今まで経験した事の無い事の連続に疲労困憊のなのはに、彼は近付き目を合わせる為に膝を付く。いきなりの行動に、なのはは戸惑いながらも彼の視線に自分も合わせる。

「高町なのは。自分は君を守る為に来た。君の指示に従う」

良く見ると整った顔立ちのその男の人は、なのはを真直ぐ見詰めて言葉を紡いだ。

無垢とも言えるその純粋な瞳は子供のようであり、それでいてどこか無機質なものを感じさせた。

そんな彼はまるで騎士が臣下の礼を取るように膝を折り曲げている

……

だが、二人のこの出会いが、後に歴史に名を残す大きな戦いへと繋がっていく……

それを知る者はまだ、いない

起動記録02（後書き）

なのはさんとの邂逅。

？「自分の任務の開始だ」

そうだね、これからの展開は劇場版ではなくアニメを基準に行きたいと思います。

？「了解。しかし、疑問がある。敵が分裂するのは劇場版ではないのか」

戦闘などはあちらを参考にするかもしれませんが、それでは感想ご指摘なんでも待ってます！

起動記録03(前書き)

更新です！

更新出来てよかったよ。

それでは本編どうぞ！

起動記録03

「私を守る……?」

何時の間にか、なのはの服装は元に戻り、フェレットはなのはの腕の中で、気絶している。

そして、なのはの危機を助けてくれた無表情の男が目の前にいる。

その男は前触れも無くいきなりなのはの事を守ると言い出した。

未だ言葉の理解が完全でないまま、彼の言葉をオウム返しのように繰り返した。

「自分はそう言う任務を受けている。君の指示に従う」

訳が解らなかった。

自分ではなく友人ならば護衛と言う人間が付けられると言うのも納得ができる事だが、自分の家は貧しくは無いが、これと言って裕福という訳でもない。

なのはは、誰がそんな事を依頼したのか、その男に聞こうとした。

「あの、誰が」

しかし、其処まで口にした所で、遠くからパトカー音が聞こえてきて、周りの家々から明かりが灯りだしていた。改めて自分が置かれている現状に気が付いた。

電柱は傾き、辺りは陥没し、塀すらも吹き飛ばしている。それは人の手によって作られるものではない。これを見た人々はいったい何を思うのだろうか。

「も、もしかしたら、私ここに居ると、大変あれなのでは……？」

なのはが現状を把握し、警察への対応やその他諸々の事象が頭に駆け巡り思わず呟いた。その言葉を聞いた彼はなのはの前に躍り出るように、体を動かして危険な言葉を口にした。

「高町なのはにとって、彼らが危険なのだ。了解、殲滅する」

まだ姿も見えないが、彼には見えているのか、ある方角を向いたまま、そんなことを確認してきた。腕を外す仕草をしているのを見て、先ほどの超威力の砲撃を思い出していた。

「せ、殲滅って？」

「高町なのはの障害を殺す。それが自分の任務だ」

その声になのはは背筋が冷えた。

真顔で感情を動かす事無く、殺すといった彼が一瞬とても恐ろしかった。

「だ、ダメ！人を殺すなんて、どんな事があってもやっちゃダメだよー！」

今、先程のような不思議な力は無い、だから自分に出来ることは絶対に付き足を止める事だけ。

なのはは、殺されても手を離さないと言わんばかりに、握り締め睨みつけた。

しかし、同時に自分では足止めにも成らない事を先程の攻撃で感じている、次の瞬間殺されても不思議ではない。

「了解。これより非殺傷設定で行動する」

しかし、それはなのはの言葉一つで呆気なく阻止された。キョトンとするなのはに、彼は目を合わせて口を動かす。

「他に指示は無いか」

「え！？えくと、とりあえず此処から離れて、静かに話が出来るところに……」

「了解」

なのはが咄嗟に其処まで口にすると、彼は多少乱暴になのはを担ぎその場をかなりの速度で駆けていった。なのはは運ばれながら、心の中である事を思っていた。

(この人、純粹な人だな……)

余りの行動に呆気にとられたりしたが、考えてみると、最初から一つの事を優先しているだけなのだ。

それに気付いたなのはは、何となくこの男性は信頼できるかもしれないと思ったのだ。

出会ってまだ数分であるにも拘らず、そんな事を考えてしまう自分が可笑しくて、少し笑ってしまった。

「とりあえず、自己紹介からね？私、高町なのは。小学校三年生、家族とか仲良しの友達は『なのは』って呼ぶよ」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だからユーノが名前です」

二人が自己紹介をしている横で、立ったままで近くに控えている彼女達を助けた男。

自己紹介をしても口を開かない彼に、なのはは話しかけた。

「え〜と、お兄さんの名前は何て言うんですか？」

「……自分の開発コードはA-01。固体名称は他に設定されていない」

「え、え〜え？」

「開発コードって……。貴方は一体何処から来たんですか？」

A-01と名乗る自己紹介に首を傾げるなのはに、質問を投げかけるユーノ。

その彼の言葉に、ユーノは彼が人間でない事を何となく理解し始めた。

「自身の情報がない。その質問には答えられない」

「それじゃあ」

「あああー！もうこんな時間！？早く帰らないと！」

携帯を確認したなのは、時間を見て焦り始め、忙しく動き始める。

「了解。送り届けよう」

無造作になのはに近付き、座っていたベンチを力尽くで持ち上げた。そのときに何かが碎ける音がした、ベンチの足が折れたのだ。それを肩に担いだ彼に、なのはは驚きながら大きな声で止めに入っ

「うわうわ！？だ、ダメだよ！物を壊したら！？戻して戻して！」

「……了解」

彼としては、なのはの負担を減らす為に休める物を用意しようと思
考した結果だったのだが、なのはに止められもとの形に戻す。

折れてしまった物は直せないの、少し不恰好であるが、座るだけならば問題ないだろう。

「物を勝手に壊したらダメですよ？皆が使うものなんですから」

「了解、公共物の破壊は最小限に」

「しないでください！」

「……了解した」

端から見るとかなりシユールな光景だろう。

大学生が小学生に説教を喰らっているのだから。

「飛ぶのもダメだよ、見付かったら大変なの！」

「………了解」

「エー零一？変わった名前だね。それで君は何処に暮らしているんだい？お礼を持って行きたいんだけど……」

高町家リビングで、彼は事情を聞かれていた。

そのときに、なのはの口から危ない所を助けてもらった、と聞きお礼がしたいといってきた。

今日は何も準備が出来ないと、改めてうかがいたいらしい。

「自分は家屋かおくを持っていない」

その発言に何かおかしな気配を感じた高町士郎は改めて質問をした。

「君は何処から来たのかな？」

「こちらに来る時、記憶系統に損傷を受けたようで、自身の情報は欠落している。その質問には答えられない」

彼の発言を聞き、土郎は考え始めた。
そして彼は口を開いた。

「自分にあるのは高町なのはを守る事だけだ」

命令に忠実な機械のように、淡々と答えていく彼に違和感を感じた土郎はある質問を投げかけた。

「君は……どういった存在なんだい？」

「……自分は此方の言葉で表すと、サイボーグ、が一番近いと思われる」

証拠を見せるように自分の機械部分を見せる。
それを見た土郎は一瞬顔を顰め考えるように目を瞑ったが、やがて穏やかな顔に変わり口を開いた。

「家で暮らさないか？記憶喪失なら、直るまで大人しくしておいた方が良いだらう」

「あら、いい考えね」

親二人が何故か乗り気で共に暮らすように言い出した。
しかも、家族もその決定に異議を唱えず、アッサリと滞在が決まっ
てしまった。

「君を作った人って言うか、君の親が見付かるまで家で暮らすと良
いよ」

(解らない……何故こつても簡単に怪しいものを暮らすさせる……)

「それなら、なのはが面倒見るの！行こ！」

肩にフェレットと手に彼の手を握り、家の案内に走っていった。

「なのはは張り切ってるな」

「弟が出来た気分なんじゃない？ほら、彼って何も知らなそうだが
ら」

彼にどう言った訳があるかは解らないが、自分達の娘の為だけに生
きていると言った彼の言葉が言いよつた無い寂しさを受け取った。
故に共に暮らすことでその寂しさを取れないかと提案を持ち出した
のだ。

「恭也如何したの？」

「父さん達には悪いけど、アイツを近いうちに忍に会わせる」

「忍さんに？」

「ああ、あいつを調べてもらえば、きつと作った奴も解るし、何が目的なのか解ると思う。自分について解るのならアイツも嫌とは言わないだろうし」

「無理やりじゃなければ、何も言わないよ」

家族を思っただけの行動であり、これが正しい人の反応だ。それが解っているのか、士郎もそれだけ口にするると何も言わなくなつた。

「それじゃあ、これからよろしくね？アオイさん」

「ああ、い………？」

「名前が無いって言ってたから考えたの、A - 01から取ったんだ。嫌じゃ、ない？」

心配そうに覗き込むのはやはり無表情で答える。

「問題ない、固体名称をアオイで設定する。よろしく頼む、高町

」

「なのはだよ！」

「たかま
」

「な・の・は！」

「……なのは」

「うん！」

なのはの笑顔を見て、言い様の無い不思議な感覚をアオイは覚えた。

今の彼には解らない……今感じたものが感情の『喜』だということ
……

起動記録03（後書き）

アオイ「本日固体名称を設定した。以後アオイと名乗る」

それは本編でいったつしょ？と言っか、話が進まないな……これで無印終わるのか？

アオイ「問題ない。誰も期待していない」

あれ！？意外と辛口！？

起動記録04（前書き）

更新しました。

ちょっと遅くなりましたが、地味に連載を続けていけそうですw w

それでは本編！

起動記録04

「おはようー!」

「おはよう、なのは」

なのはが自室から出てきて、アオイと挨拶を交わす。
昨日付けられたばかりだが、アオイはその名を呼ばれると、なぜかとても可笑しい気持ちになる。
その感覚に戸惑いながら、なのはと一緒に歩き出す。

「名前を呼ぶの慣れてくれた?それと昨日は眠れたかな?」

「問題ない」

「そっか、良かった!」

短い受け答えだが、なのははアオイが無口である事を昨日の間で理解している為、それだけで終わった。

無口な人間はどこにでもいる。

なのはにとっては短い受け答えだけでも十分心温まるものだった。

「おはようなのは、君も昨日は眠れたかい？」

リビングに入ると、既に起きていた家族から挨拶を受け、なのはと同じ質問を投げられた。

それに対してアオイが応えようとすると、横に居たなのはが替わりに答えた。

「うん！アオイ君昨日は大丈夫だった」

「アオイ？」

聞きなれない名前を聞いて、首を傾げる。

なのはは今思い出したかのように言葉を重ねる。
まるで誇る様に胸を張り、父に彼の名を告げた。

「あ、忘れてた。名前が無いって言ってたから、私が付けたの。アオイ君も良いって！」

「そうか、それなら改めて……ようこそ高町家へ、アオイ」

「あら、名前が決まったのね？」

キッチンから朝食を持ってきた桃子が話に加わる。

エプロン姿で調理中の物を片手に会話に加わる桃子。

「そうだ。もう作ってしまったのだけれどお食事は出来るのかしら？どつせなら皆で食べたいの……」

「人間に溶け込む為の機能は全て揃っている。食事は問題なく摂取できる」

それを聞いた桃子は嬉しそうにキッチンに戻り、大皿に盛り付けを始めた。

何時もより多い朝食も、一人家族が増えて賑やかとまでは行かないが、明るい普通の家族の風景が其処にあった。作り手である桃子は、量が増え、家族が増えた事を心から楽しんでるようだった。

（何が楽しくて笑っている……これが家族……？）

何気ない日常会話、楽しくも無いその話でそれでも笑いが耐えない風景に、アオイは違和感しか感じなかった。だが、その違和感もどこか羨ましく感じるだけの知性を持っていたアオイは、なぜこのような気持ちになるのか皆目見当がつかなかった。

何時かアオイも些細な事で笑える日が来るのだろうか……？

「だから付いて来なくって大丈夫なの！」

「しかし……」

食事を終わらせたなのははは学校に行く準備を整え、家を出ようとした所で付いて来ようとするアオイを捕まえた。

「学校は危なくないから大丈夫なの、護衛とかいらなの」

自分の任務が護衛だ、と言って学校まで付いて来そうだったのでその場で説得しているのだが、中々納得してくれない。

彼は相当頑固だ、となのはは心の中でため息を零した。

「それならバス停まで送ってもらったらどうかしら？それなら安心できない？」

桃子が妥協案を出して、それでも渋っていたが、漸く納得をしてくれたようだ。

今日はこの後に、恭也と出かけるようなので来れないが、迎えに毎日来るようだ。

そこまでしなくても良いと言ったのだが、どうやら妥協点はそこまでらしい。

心配されるのは嬉しいが、少し苦笑いを浮かべる。

「なのはちゃん！」

「なのは、こっちこっち！」

「すずかちゃん！アリサちゃん！」

バスに乗り込んだのはは、親友のアリサ、すずかを見つけ早速でバスの一番後方へ向っていった。

一番後ろの席で背後を振り返れば、既にバス停から離れ始めている。

「ところでなのは、あの人ってなのはの知り合い？」

バスが発進した所で、アリサが不思議そうに後ろを見ながら聞いてきた。

「ふえ？」

その言葉に釣られて後ろを見ると、未だに立ち続けているアオイの姿があった。

「そう言えば、なのはちゃんと一緒に歩いてたよね？」

「あの人はアオイ君、新しい家族だよ！」

嬉しそうに語るなのは徒は対照的にアリスは険しい表情を浮かべて。

「まさか！おじさんの隠し子！？家庭崩壊の危機じゃない！」

「ええっ！？」

「ち、違うよっ！ええっど……」

その後詳しい事情を説明するのにホームルームまでの時間をフルに使ってしまった。

「ダメね……全然解らないし、これ以上見ていたくないわ……」

大きな月村家の屋敷の中にある工学関連で敷き詰められた部屋の中で、一時的に機能を止めて寝ているアオイとガラス一枚隔てた部屋の向こう側に、その身体を調べ顔を大きく顰めた忍、更にその恋人である恭也がいた。

「全く解らないのか？それに見ていたくないと言つのは……」

「今の技術じゃないのよ、この人の中にある機械類は……。それにこんな悪趣味な人体改造なんて長い事見ていたら頭が可笑しくなりそうよ」

忍は精神的に滅入ってしまったのか、テンションは低く、気分も悪そうな顔でキーボードを叩く。

そのキーボードに打たれた指示に従い画面に映し出されたデータと映像に、恭也の顔も真剣みを増した。

「これは……」

「そう、この人に残された肉体は……【心臓】だけ。……そしてその心臓に、全ての機械が接続されてる形になると思うんだけど、其処から複雑すぎて解らないし、こんな回りくどい構造にしないで、一から作ってしまえば早いと思うのよ。態々、人の身体を使わなくても……ね。しかもこれ、何回にも分けて行われてる形跡があるし、やる側も、受ける側も、狂ってるんじゃないわ」

「だ、だが機能を止めていると言う事は、今は心臓は止まっているということになるんじゃない……」

忍がキーを叩き何かを入力すると、ガラス一枚隔てた向こう側で、アオイは何事も無く起き上がり、次の指示を待っているかのように恭也達を眺めている。

「大丈夫よ。どう言う理屈か知らないけど、心臓は死なないように保護されているわ。いえ、無理やりに生かされている、と言うべきかしら？」

近くに設置されているマイクに口向って、忍はアオイに部屋から出ているように指示を出した。

「まあノエルの件もあるし、恭也は大丈夫だと思っけど、人間扱いしてあげてね？初めてアオイ君に会った私が言うのもなんだけど、忘れちゃった記憶が思い出せなくなるほど、良い思い出を作っであげてね？あんな常軌を逸した改造を施された記憶が、良い思い出な訳ないんだから……」

彼の施された改造が其処まで衝撃的だったのか、悲しみの表情を浮かべ静かに願った。

「……解っている。悪い奴ではない事は少し話して知ってし、父さんも母さんも乗り気だ。良い思い出に関しては期待できると思う、任せておけ」

其処まで会話をしたところで、扉からノック音がしたと思ったら、扉の向こうから声が聞こえてきた。

「恭也、聞いても良いだろうか？」

聞こえてきたのはアオイの声、必要以上の言葉を放たないアオイが、自分から尋ねてきた事に少し驚きながらも返事を返した。

「何だ？」

「今からならなのは迎えに間に合う。此処から離脱しても構わないだろうか？」

「あ、ああ、構わないぞ。此処まで付き合わせてすまなかつたな」

「了承を確認。それでは失礼する」

機械的に行動を開始し、屋敷から去っていくアオイに、恭也は苦笑いを浮かべた。

「なのはの事には全力で答えてくれるから。まあ、信頼は出来ると思ってるよ」

「……そっか」

恭也は今現在の自分の考えを述べた。

短い間で全てを信じる事は出来ないが、彼は彼なりにアオイと向き合い、信頼する事を決めた。

起動記録04（後書き）

まったく話が先に行かないな……

アオイ「作者の構成力の無さが原因であるとデータでは出ている」

酷い！？本当だけでもそれは幾らなんでも傷付きますよ？

アオイ「そんな事よりも可笑しなことを質問する」

ああ、はいはい

アオイ「自分には心臓が残されているのか？肉体は逆行出来ないのではなかったのか？」

なあ〜んだ、そんな事か……秘密です。

アオイ「……ロック……ヘヴィバレル、発射」

あああぎゃあああああー！

起動記録05（前書き）

更新です。

何とか書けたけど、感情とか良く解らない。
キャラの心情を書ける人を尊敬します

起動記録05

「下校時刻に間に合わない。工事中は想定外だ」

月村家から出てから真直ぐになのはを迎えに向ったのだが、途中工事が行われており遠回りをしなければならず下校時刻に間に合わなかった。

家を飛び越えたりできればよかったのだが、それはなのはに止められている。

「このまま帰宅」

「ちょっと！あんたたち何なのよ！！」

帰宅しようとした進路を変更しようとした所で、日常ではありえない光景に目を引かれるアオイ。

始めは単なる知的好奇心からの観察であったが、車から引き摺り出され、違う車に乗せられた時に見えた顔は彼のデータの中に有った顔だった。

それも極最近入手した物の中だ。

「なのはの友人、アリサ・バニングス、月村すずかの両名を発見。拉致されていると考えられる」

興味があるのは拉致という現象のみで、それが護衛対象でない為に記録のみに止め、そのまま走り去る車を見逃した。しかし、帰路に戻ろうとするアオイに、縋り付く様にして懇願する執事風の男が居た。

「ど、どうか、お嬢様を……お嬢様方をお助けください……！」

一番近くで見えていた自分に縋り付いたのだろうか、助ける気等全く無い彼は、そのまま気絶してしまった男を無視し、歩き出そうとした。

そこでふと、男の言葉が士郎に言われた言葉に重なった。

それは、月村家に赴く前の出来事だった。

士郎に呼び止められ、居間で向かい合っている。

『君はなのはを守るといったが、君にとって「守る」とはどんな言う事だい？』

『その人物の身柄を保護する事と、命を狙う者、もしくは敵対者の殲滅。それ以外に守るといふ言葉の意味はない筈だが?』

アオイには話の内容が理解できていなかった。

士郎の言う守る事と、自分が考える守るといふ事の違いを全く見出せず、聞き返した。

『いやなに、僕の言うことが全て正しいと言つ訳じゃないんだけど、僕も昔、人を守る仕事をしていたからね。人を守る事の難しさ、それを知っているから聞いてみたくなつたんだ』

『敵対勢力を殲滅してしまえば、結果として守られた事になる。それではダメなのか?』

元々殺人用に作られた彼は、記憶を無くしてもどうしても思考が其方の方向に行つてしまう。

『そうだね、それでも言葉の上ではその通りだ。でもね?本当に守るといふのはその人の“心”って言うのかな?精神的にも守つてこそだと思ふんだ』

『精神的……』

『その人の周り、其処で起きる悲しみを出来るだけ取り除ければ、最高だけど、それは家族だって難しい……でも、それが出来れば素晴らしいと思わないかい？』

笑って話す士郎に、葵はその意味を理解しようと思いを加速させる。しかし、答えは一向に出でこず、さらに険しい表情をしていたのか、士郎は苦笑いを浮かべ、アオイに言葉を贈った。

『まあとりあえず、人助けをすれば解るかもしれないな』

腕を組み、思い出した言葉と今の現状を比較する。

「……この場合、なのはは友人が事件に巻き込まれ悲しむのか？人助け……未だ行動の理由として理解に苦しむが確保しよう」

士郎に言われた事と、守ると言う事の意味を求めて、アオイは行動を起こした。

だが、空を飛ばうとした時に、なのはの指示を思い出した。

「……能力の使用は避けねばならない。走って追跡する」

なのはに指示された事とは、街中での能力使用の禁止であった。その意味としては、目立つ行動で人を驚かせないなどがある。

「時速八十で維持、拠点到着と同時に組織を破壊する」

しかし、なのはの気遣いも虚しく、単純な速力で車に並走できてしまふ。

この疾走する姿は、後に都市伝説になるが、今は語るまい……

少女たちは恐怖していた。

連れ攫われ、訳の解らない場所に連れてこられた少女たちは次に何をされるか気が気ではなかった。

「へへへっ、引き渡す前にそれ相応の報酬を貰わねえとな」

「お前、そういう趣味が有ったのかよ……」

徐に手を伸ばそうとする大柄の男に細身の男は失笑を漏らす。

「ばあーか、ちげえよ。こいつ等小学生って言っても金持ちのお嬢さんだ。少し位持たされてても可笑しくねえだろ？」

「成る程、文字通り小遣い稼ぎ、か」

それに乗るように細身の男も近寄り彼女たちを見下ろす。

口を塞がれ縄で繋がれた少女の一人であるはずかは、これからされる事を耐える様に眼を閉じ、アリサは睨みつける事を止めなかった。

「止まれ。その人物達は此方で保護する」

途中まで伸びていたその手が止まり、何事かと繋がれていた二人も顔を向ける。

「取引先、では無い様だな？兄ちゃん誰だい……」

そこに居たのは何処にでも居そうな若い男。

服がありえない擦り切れかたをしている他に特徴と呼べる物は無い

が、無表情で何処か人形めいた雰囲気を持っていた。

「少女二人を保護し送り届ける。敵対するなら殺

」

徐々に歩きながら近付いてくるアオイに、男たちは警戒しながら懐に手を伸ばす。

しかし科せられた規制に引かかる言葉だった為に、歩みと言葉が止まり、空を仰いだ状態でアオイは情報の再確認をしている。

「ああ？ころ？まさか殺すとも言うんじゃないだろうな？」

「それは出来ない。なのはに規制されている。敵対するなら気絶で止めよう」

確認作業を終えたアオイは淡々と作業であるように告げる。

しかし、男達にとってそれがバカにされたと感じられた、青筋を立てながら懐から拳銃を取り出し、アオイに突き付けた。

「良い度胸だな。だけど状況がわか……って……」

徐々に声が尻窄みになっていく男たち。

その原因は突き付けていた拳銃がいつの間にか近づいていたアオイの手によって捻じ曲げられたからだ。

「武装を確認。敵対する意思有りで見なし、攻撃を開始する」

その後は取引相手らしき人間たちも纏めて蹴散らし、縛り上げると二人の少女の縄を解き始めた。

「「ありがとうございます！」」

恐怖から逃れた事で、精神的に磨耗していた少女たちはお礼を言つと、その場でへたり込み、笑いながら抱きしめあっていた。
アオイはその笑顔を見て

「あれ？そう言えば……貴方はなのはちゃんの所の……」

「……魔力反応検知。なのはの反応も徐々に接近中。……緊急事態のため自分は戻る」

「へ？」

小声で何かを呟いたと思ったら、その場から走って行ってしまった。その行動に唾然とし、暫らく放心状態だった少女たちは遠くから聞こえてくるサイレンに気が付くと大声を上げた。

「何で私たちを置いていくのよぉー!!！」

優先順が低いため、かなりいい加減な行動をとったアオイは走りながら車を抜き去って行った。

「……………帰還完了」

結局なのはの戦闘に間に合わず、一人晩くに帰り着いたアオイは扉を開ける。

「アオイ君ッ!!！」

扉を潜り、靴を脱いで玄関を上がると、なのはがアオイに飛びついていた。

「ありがとうっ！」

「……何についてのお礼だろうか？自分には心当たりは無い」

いきなり飛びつかれ、お礼の言葉を言われたアオイは何についての言葉か全く心当たりが無かった。

今日はむしろ、助けに向えなかった事でアオイの中では任務失敗である。

「さっきアリスちゃんとすずかちゃんから電話があったの！アオイ君に助けられたって！だから、ありがとうなの！」

笑顔を浮かべ、そのままリビングに向うのはをアオイは無言で見続けていた。

「ん？どうしたんだい？立ち止まったりして……」

リビングに向う途中の士郎が、玄関で立ち止まったまま動かないアオイを見つけ話しかけた。

「士郎、まだ守ると言う物の意味がつかめない。しかし……」

そこで言葉を止めると士郎に向き直り、手を胸辺りに当て口を開いた。

「人が笑顔を浮かべるのは……悪い物ではない気がする」

その時、アオイの口の端が動いた。

誰にも気が付かれる事無く、自分でも気が付く事無く、彼は始めて笑顔を浮かべた……

起動記録05（後書き）

どうも、作者です。

アオイ「固体名称アオイ。起動した」

で、今回の話ですが、アニメ二話目の神社での時間帯ですかね？

アオイ「今回も話が進まない。作者のスペックが足りない模様。改善策は……」

と話が長くなりそうなので無視してっと。感想ご指摘なんでも待ってますのでよろしくお願いします！

アオイ「故にもっと

しなれば

向上する

」

まだ話が続いてる！？

起動記録06（前書き）

更新です。

今回の話は、なのはが決意を固める二話を弄った物です。
なのは視点で書けないから、話が全く違うw

起動記録06

なのはの学校からの帰り道での出来事。

「高町さくん、プリントわすべっ！？」

「ふ、ふええ〜！？」

何時も通り帰り道を歩いていると、忘れ物を届けに来た男の子が突然飛んだ。

比喩でもなんでもなく、前触れなく横っ飛びに吹き飛び、意識を失った。

「……沈黙を確認。生命維持に問題なし、クリア」

少年の気絶の原因は、現在高町家に居候している青年によって行われていた。

うんと離れた位置のビルから、狙撃しているアオイがいた。

気絶に抑えるために最小限にとどめられた特殊弾を放った腕は小さく煙を上げていた。

「……異常なし」

ある事故で重要なデータの殆どを失い、自分で気が付かない間に歪んでしまった命令を忠実に守っていた。「なのはを守る」と言う命令以外にも、本来、人を殺す事に特化したその身体で、なのはに言われた殺してはいけない、と言う命令を。
その能力の方向性が、今後どのように関係してくるのか。
それは現在の彼にも解らない。

「もっつ！ああいう事はしなくて良いからっ！」

帰ってきたなのはにアオイは怒られてしまった。
本人は何がいけなかったのか理解できていないが、なのはに言われたからと、渋々ながら了承し今後はしないと約束した。

「もっ……心配してくれるのは良いけど、過保護すぎだよ」

その場から歩き始めたアオイの背に向ってなのはは愚痴を溢した。少々顔がにやけているが、彼女自身も気が付いていないようだ。過保護と言えるほどに構われる事が、なのはにとって、この上なく喜びに感じられていた。

『アオイ、さん……。少しお話しても良いですか？』

『問題ない。自分の答えられる範囲ならば答えよう』

なのはが自室に戻るのを確認して、ユーノが念話を繋いできた。

アオイにもリンカーコアは存在しているようで、念話や魔法は覚えようと思えば使える。

そのため、ユーノが利便性を考え、念話だけでも、と言う形で習得した。

『それじゃあ今更ですが……。まず貴方の使っている力について教えてください。あれだけの大出力にも関わらず、魔力が一切感じられませんでした。でも質量兵器と言う感じでもなかった……。あれは何ですか？』

なのはがいる前で、なのはが頼りにするアオイを疑うと言う行動に出ることに、気が引けていたユーノはなのはから離れ、質問する時間を漸く確保した。

『詳しい事は自分も把握できていない。自分に把握できているのは、自身の武装の使用法と人物データだけだ』

『人物データ？』

『対象、及びその周辺の人物のデータだ。ユーノ・スクライアのデータも記録されている』

ユーノはその内容に驚きを隠す事が出来ず、思考に埋没した。

次元世界の何処かで作られたと、初めから解っていたが、自分のデータすら記憶して有ると思っていなかった。

『どう言う事だ？僕となのはが会ったのはアオイさんと会った前だけど、それも数時間ほどの差しかない。それなのに、なのはの周辺の人物で僕が……？』

『それは不明だ。しかし、自分はユーノ・スクライアも護衛対象に設定した』

「え……？」

益々アオイの疑いを濃くしていたユーノに、信じられない事を言っ

て来た為に、念話を忘れ、口から声が漏れる。

『ユーノ・スクライアが傷付くと、恐らくなのはは笑わない』

口を空けたまま、その言葉を聞いたユーノは口元に笑みを浮かべた。

『僕はユーノだよ、アオイ。ユーノって呼んでくれるかな？』

『了解した。これからはユーノと呼ぼう』

(疑う材料はいっぱいあるけど、なんだかバカらしくなっちゃったな、ははっ。そう言う事態になったら、その時考えよう)

真直ぐすぎるアオイに、毒気を抜かれたのが、ユーノはそれからアオイを疑う事を止めた。

機械や、生物学の専門家でもない自分には、疑うよりも、信じる事の方が重要に思えた。

「魔力反応検知。この反応は彼らからか……」

現在アオイは、はのはから離れて行動している。

居候と言う立場上、頼まれれば買出しくらいはやらねばならないからだ。

最初はなのはから離れなかったアオイだが、最近はその辺りを柔軟に対応するようになっていた。

『ユーノ、ジュエルシードの反応を検知。二人組みの人間が所持している。場所は』

場所を伝え、なのは達が来るまでの間、監視する事になった。

アオイは、暴走を力尽くで止められるが、封印は行えない。

その為、刺激を与えないように、所持しているなのはと同世代ほどの少年と少女の後を着けるに留まっていた。

『アオイ、気を付けて。ジュエルシードは、人の思いの力に強く反応する！』

ユーノの忠告を聞いた直後それは起こった。

「……魔力反応増大！暴走開始」

一瞬で、頭の中で計算を行った。

溢れ出す魔力の量から考えて、かなり大きな現象が起きると推察される。

そうならば、人が何人も死んでしまいかもしれない。

「なのはは、人が死ぬのを嫌がっていた。……ならば被害を最小限に。……緊急時に付き能力を使用する。IS発動、レイストーム。同時演算、シルバーカーテン」

ジュエルシードが完全に発動する前に、レイストームの性質を拘束に変え、少年たちを包んだ。

ジュエルシードの暴走で発現したのは樹だった。

その樹がアオイにより、空中に運ばれるが、其処でも成長を続ける樹が地上に向って根を伸ばすが、拘束に阻まれ地上を荒らすことはなかった。

その異常事態でも、待ち行く人たちは幻影によってその姿を認識する事が出来ていない。

「当初の目標をクリア。しかし……」

今尚成長を続ける樹に対して、常時能力を使い続けるアオイの腕は、嫌な音を出し煙を吐き出し始めた。

「許容量を越え始めた。破壊なら出来るが……」

アオイの力は、火力や殺傷性に富んだ作りをしている為、今のよう
に専守防衛には不向きであった。

一応の能力は持ちえているが、その出力や性能と言った物は他の武
装よりも一段も二段も落ち込んでいる。

「人の想いとはこれほどまで。……ッ、腕部破損、出力低下。これ
以上の遅延行動は不可と判断し、これより……」

武装を切り替える為に一瞬、拘束を弛めたアオイ。

しかし、まるで狙い済ませたかのように、桃色の閃光が肥大し続け
ている樹木を直撃した。

その光で封印された樹木は小さくなり光となって消えて行った。そ
の中に囚われていた少年たちは近くのベンチに座らせる。

「作戦終了。なのはと合流する」

やるべき事が終わったと判断したアオイは、全ての能力展開を終了

させ、なのはが居るビルの屋上に飛んだ。

「おゝい、アオイ君っ！だいじょう……っ！？アオイ君！腕が！？」

なのはがアオイの姿を見て、叫び声に近い声を漏らした。

アオイの腕は、能力の過負荷と、ジュエルシードの魔力余波によって悲惨な状態になっていた。

しかし、酷い状態に見えるが、今回は運が良かった。本人さえも気が付いていないが、たった一つで小規模次元震を引き起こすジュエルシードが、アオイの中にある物と共鳴していたら、大災害になっていたかもしれない。

「わ、私、気が付いてたのに……あの子を持つてるって解ってたのに、気のせいだって思っちゃったから……アオイ君にこんな怪我を！」

ジュエルシードを持っていたのは、どうやらなのはの知っている人間だったようだ。

泣きそうな顔をしながら、アオイに申し訳なさそうに謝り続けた。

「これから私、もっと頑張るからっ！お手伝いじゃなくて、私の意志で、誰にも迷惑が掛からないように！」

罪の意識に苛まれているのか、なのはは決意のように言い続けた。

「……なのはが泣いているのは、どうしてだかいけない気がする。自分なのはを守れなかったのだろうか？守れていたのなら、笑って欲しいのだが……？」

なのはは、アオイの言葉で一瞬顔を上げるが、直ぐに顔をクシヤリと崩し、アオイの服に顔を埋めた。

『ユーノ、このような場合、人はどのように切り返せばいいのだろうか？』

『いや、僕に聞かれても……』

『これが、困ると言う事か……』

なのはが泣き止むまで、暫らくその場から動かなかった。

起動記録06(後書き)

無印はアツサリと行きたい所。

自分の中ではA・sからが本番だと思っていますからWW
それまで頑張つて続けたい。

起動記録07（前書き）

更新です。

それにしても、地震は恐ろしかった……

家に帰ったら本棚が倒れて、その下にあったテレビとPSS3が壊れてた……orz

起動記録07

「少し時間が掛かってしまったけれど、どうかしら？私が出来る範囲で直したつもりだけど……？」

機械の軋む音を出しながら、手を開いたり閉じたりして、具合を確かめるアオイ。

「……機能が二十%まで回復、通常生活に問題なし。感謝する、ドクター忍」

ジュエルシードの暴走を食い止めたアオイは、大破した腕のまま帰宅した所、高町家全員が青ざめていた。恭也の計らいで、以前調べてもらった忍に、修理を頼める事となって、現在に至る。

物言わぬガラクタとなった両腕を二十%まで回復できただけでも、この世界であればかなりの物だ。

「こつちとしても、こんなオーバーテクノロジーを生で触れるんだから、趣味と実益を兼ねた、って所だから、お礼はいいわよ」

反応の遅い腕を庇いながら、ゆっくりとした動作で寝台から降りる。戦闘では使い物にならないが、なのはのサポートに回れば済む事だ。

「それでは自分は、なのはと合流する」

今日のはのはが、月村家にお茶会で呼ばれ、既に楽しく会話をしているだろう。

アオイは邪魔にならない範囲で傍に居るつもりのようにだ。

「ふふっ、すずかの事もよろしくね？」

「なのはの友人は護衛対象内だ」

その後静かに部屋から出て行くアオイ。

歩きながら、手を使わない戦闘のシミュレーションを行い続けた。

最大火力であるヘヴィバレルが使えないのは多少響くが、今まで出てきた敵の戦闘能力から考え、問題無しと判断した。

「ユーノ君ッ！」

なのは達を外のテラスで見つけ近付いていくと、突如ユーノが駆け出した。

彼が駆け出した方角から僅かに魔力反応を確認し、大体の事情は理解したアオイはそのまま近付いていく。

「何か見つけたのかも、ちょっと見てくるね？」

「一緒に行こうか？」

なのはがユーノを追いかける為に立ち上がり、すずかが一緒に探そうと立ち上がった。

「なのはの護衛は自分の仕事だ、問題ない」

そこでアオイは会話に割り込み、すずかを座らせ直した。

「あれ？アオイさん、もう平気なんですか？」

「ドクター忍は優秀だ。通常状態は問題ない」

すずかの質問にアオイは答え、なのはとすずかはホッと一息ついた。

「ちょっと、どついう意味よ？」

「それはね……」

一人訳が解らなかつたアリサに、さすがが事情を説明しだした。その間になのはとアオイはその場から遠ざかる。なのはは、さすがに心の中で謝りながら、林に足を踏み出し、先に駆け出したユーノの後を追う。

「発動した！」

ジュエルシールドが何らかの物に反応し発動、前回の様に暴走している様子は見られないが、人目がある為、魔法を使うことができない。アオイが手負いの今、戦闘になつた場合を考え能力使用を控えなければならぬ。

「僕が結界を作る！あまり大きなのは作れないけど、この家の付近くらいなら何とか……！」

ユーノが魔方陣を展開し、結界を発動させる。

大きな物は作れないといっているが、一人で作る物としてはかなり広い。

謙遜しているが、アオイのデータ上、なのはと同年であると考えると、Aランク相当の魔道師であるのはかなりの才能と言える。比較対照のなのはの才能が、常軌を逸しているだけだ。

「……………」

「……………」

結果を発動させると同時にジュエルシードの効果が発揮された。其処までは良かった。しかし、その効果で出てきたものになのはとユーノは言葉を失った。

「…………少々大きいが、猫科の動物だ」

そう、猫なのだ。

猫屋敷のように多くの猫が居る月村家に居たうちの一匹だ。それが子猫だったにも拘らず、三、四メートル程まで急激に巨大化した。

「あ、ああ、あれは…………？」

「たぶんあの猫の、大きくなりたいてって思いが、正しく叶えられたんじゃないかと……………」

「とりあえず、襲ってくる様子はないし、ちやちやっと封印を……………」

暫らく呆然としていたが、我に返ったなのは、レイジングハートを取り出した。

「……！魔力反応を検知。警戒態勢！」

「え……？」

なのはが、アオイの言葉に釣られて、後ろを振り向くと、黄色い閃光が駆けて行き、それに反応するかのように猫の叫び声が上がった。

「攻勢魔法を確認。捕縛する」

アオイは攻撃を確認すると、それを放った相手の位置を正確に把握し、肉薄する。

「……！？バルディッシュ！」

いきなり距離を詰められた襲撃者は、咄嗟に手に持つ杖を前に翳し、防御を展開する。

アオイは襲撃者である少女の目の前まで接近し、蹴りを放ちシールドを破壊、そのまま第二激を繰り出した所で行動を停止した。

「……データに該当する魔力反応を確認。これは……」

蹴り足が、少女に接触する寸前で停止し、数秒見詰め合う形になっていた。

「はあああっ！」

少女は、手に持つ杖の形状を鎌に変えたと、そのまま斬りかかった。アオイは、それを何とか回避すると地上に降りて膝を付いてしまった。

「アオイッ！」

ユーノが近付き心配そうに見ている。
なのはも此方を心配していたが、直ぐに切り替えて、少女に向き直った。

「アオイ、さっきは如何したの？急に動きが止まって……」

「……………きない」

「えっ？」

「自分は彼女に攻撃できない」

アオイの言葉にユーノは驚き固まってしまった。

「……………彼女は、自分の……………護衛対象者だ……………」

頭を抑え、現状を睨んでいるアオイ。

なのはの敵を排除しようとする指令と、護衛対象者を傷つけてはいけないと言う指令が頭の中で交錯し、アオイを苦しめていた。

「きゃあああつ!?!」

空で争っていた彼女たちはなのはの敗北で幕を閉じた。

ゆっくりと落下してくるなのはを抱き抱え、封印処置を施している少女を見つめる。

処置を施し終わると、少女は此方を一瞥し、そのまま跳んで帰っていった。

「フェイト……………テストロツサ・ハラオウン……………」

今現在はハラオウンではない彼女だが、未来のデータを持つ等、その時は誰も気が付く筈がなかった。

起動記録07（後書き）

如何でしたでしょうか？

最近書く時間が減って、大変更新速度が遅くなっている。

それに加え地震により一部機器が粉碎。

何時本格的に壊れるか恐々としながら書いてます。

感想ご指摘なんでも待ってます。

起動記録08(前書き)

更新です。

今回は戦闘無しです。しかも原作を省略w。
本編をご確認を

起動記録08

「アオイ君。温泉楽しみだね？」

車に揺られながら、仲の良い兄妹のように話しかけるのは。

「自分には効果は無いが、温泉と言う物には、効果があるらしい。身体に良いのならば、ゆつくりすると良い」

「アオイさんって温泉の事も知らないの？」

アオイの発言にすずかはかなり困惑の表情をした。

「そうなの。アオイ君が初めて家に来た頃なんて、温泉どころか、お風呂だって知らなかったの」

「お風呂もって、あんた……」

アリサが呆れた表情でアオイの事を見詰める。

この常識すら知らない人物がサイボーグと言われても普通は気が付かないし、アリサでも助けられた時の異常な身体機能を見ていなかったら信じていなかったらう。

「いまは洗淨であると、正しく理解している」

「「「それ違うー!」「」」

そこからアオイは、なのは達に如何に温泉が良い物であるかを、目的地に着くまで繰り返し聞きされることになった。

(た、助けて!?アオイ!!)

恭也に連れられて来た男湯の前で逃げる様にアオイの肩まで上るユ
ーノが居た。

(どうした。敵か?)

ユーノのあまりにも慌てた姿に、アオイは警戒をし始め回りを見回すと、隣の女湯から、髪を下ろし着崩れした姿のなのが出てきた。

「もっつ！何で逃げるの、ユーノ君！」

(お、お願いアオイ！なのはの説得を……！)

かなり必死の形相で、ユーノがアオイの肩に捕まる。

「……なのは、ユーノの性別は男性だ」

「えっ？知ってるよ？」

「温泉と言う場では女性と男性は別けられると……」

ユーノの願い通り、与えられたばかりの情報を元になのはの説得を試みていると、とある紙を見つけ、言葉を止めた。

「……」

「キュツ！？キュキュツ！！」

無言のままになのは手に移されたユーノは身体をバタつかせ、涙眼でアオイを見詰める。

その目を受けたアオイは、壁にかけてある紙を指差し、ユーノに言った。

「ルール上問題は無い。これ以上の説得の言葉が自分には見付からない」

(十歳未満……入れます……?)

そこには、銭湯の様に入れると言う事が書かれていた。

「アオイ君ありがとうっ！それじゃ、行こうかユーノ君ッ」

(そ、そんなあ~~~~~!!)

鳴き声を上げ拒否を示すが放してもらえず、そのまま女湯に飲み込まれていった。

そこで、先に男湯に入っていた恭也が顔を出し、何時までも入って

こないアオイを呼びに来た。

「どうしたんだ、アオイ？早く入ろう」

「了解した」

温泉を出てから、なのは達と旅館を歩いていると、目の前から額に宝石のような物をつけた女性が歩いてきた。

（魔力リンクを確認。逆探知を行なう）

「アンタだね？家の子にアレしてくれちゃったのは」

なのはに向ってそう語り掛けた女性は顔をなのはに近づけて、値踏みする様子上から下までじっくりと見る。

しかし、そんな怪しい行動をする相手を、アオイが許すはずもなく、なのは達の間に立ち牽制する。

それを見た女性は、勘違いだと謝罪し、ユーノの頭を撫でた。

そしてこの場の関係者だけに解る様に、念話で此方に釘をさしてきた。

『そういう事だから、そっちのお兄ちゃんもよろしくね』

アオイに向って、さらに念を押すとそのまま立ち去ろうとする。

『そちらも気を付けた方が良い。自分には使い魔である君に対しての、行動規制は受けていない』

アオイの言葉に一度振り向くと、何食わぬ顔で、そのまま温泉の暖簾を潜っていった。

「なのは、自分はこれから外に出る」

「あ、じゃ私も……」

「拒否する。なのはは部屋に」

「あ、……はい」

有無を言わせず、強引に話を切り上げたアオイはそのまま緑の生い茂る森の中に入っていく。

先程探知を行なった元に向かう。

「自分に戦意は無い。話を聞きたい」

森のある場所に辿り着いたアオイの前には、私服姿からバリアジャケットに切り替えた金の髪の少女がいた。

少女は突然のアオイの登場に戸惑っているようだが、前回攻撃を寸止めた事が利いているのか、いきなり仕掛けてくるような事は無

かった。

「……こっちはありません。私はジュエルシードを集めればそれで……」

「第一に、君はフェイト・テストロッサ・ハラウンで合っているか？」

アオイは話を無視して、自分の質問を投げかけた。

「……？私はフェイト・テストロッサです。最後のは知りません」

最初の質問から外してしまい、アオイに思考に影がさした。

「……では第二に、君はなのはの知り合いではないのか？」

「意味が解りません。あの子と一緒にいる貴方がそれを一番理解できている筈ですが？」

律儀に答える辺り、この少女は素直で良い子である。

しかし、これで益々アオイに下された命令の意図が読めなくなってしまうた。

「……それでは最後の質問。自分との面識はあるか？」

「……は？」

いよいよ持つて意味が解らなくなったフェイトは、呆けた顔と、可笑しな声を上げてしまった。

「……。すまない、忘れて構わない」

その表情から、自分との接点が無いと解ったアオイはそのまま踵を返して旅館に向かって歩き始めた。

「えっ？……あ、あの！……この事は……！」

「聞かれなければ答えない。自分にはこれしか言えない」

両者を守るという制約がある以上、どちらかが不利になる発言は出来ない為、こう言った回りくどい事しか言えないのだ。

そもそも、言つつもりであったのならば、ここになのはとユーノがいる筈だが、ここには居らず旅館、アオイは自分の知りたい情報の為だけにフェイトとの会話を望んだのだ。

「なのはがまた世話になる」

それだけを言つてその場から旅館に帰るアオイを、フェイトは手に持ったままのデバイスを持ちながら、何処か自分に似ていると感じながら見送つた。

その夜ジュエルシードを発見したが、狼の使い魔はユーノが、なのはがフェイトと戦い、アオイは護衛対象が二人も揃つたこの場から離れる事も出来ず、なのは達の戦いをただ見ている事しかできなかった。

その日はフェイトの勝利で幕を閉じ、ジュエルシードも奪われると言つ、なのはにとっては苦い思い出になつてしまった。

「もどかしいとは、今の状態の事を言つのだろうか？」

起動記録08（後書き）

如何でしたでしょうか？

この小説の主人公はアオイ君なので、アオイ君視点で行くと、幾らかは原作の話しが今回の最後のように飛ぶかもです。それでもよろしければ、これからもよろしくお願いします。

起動記録09（前書き）

更新しました。

今回はお話に動きなし！
それでは本編をどうぞ

起動記録09

「ぐっ……何故、データが合致しない……」

アオイは命令の不一致を解消する為、情報を整理していたが、急に頭を抑え、情報の明らかな差異に気が付いた。

「魔力の波長は同質、しかし魔力量が明らかに少ない。なのはの時は記録を無くした反動だと思ったが、二人目もとなると……それに何故彼女達が争っている？知りたい……」

魔力量は成長と共に増える事はあっても、少なくなる事は衰える事でしかみられない。

当然、戦闘に使用すれば、減るには減るが、アオイはその時の全魔力を測ることが出来る。

明らかに成長途上なのはのと、フェイトの存在は可笑しいのだ。そもそも争う関係ならば、両者を守るなど矛盾も良い所である。

「アオイ君、どうしたの？」

「なのはか……問題ない、自分は何時も通りだ」

なのはは苦しんでいるアオイを見つけ声を掛けた。

アオイは問題ないというが、なのはにはそれが嘘だとわかった。何故なら、アオイの顔は何時も無表情な筈なのに、その時は苦しうに顔を歪ませていたのだから。

「嘘ついちゃダメツ、私たち家族なんだから！」

「……家族……？」

今日は珍しい日だ、となのはは思った。

アオイの表情が今度は目を丸くして、驚きを表していた。

なのははアオイの変化に少しばかりの喜びと、家族だと思ってくれていなかった事に悲しみを含んだなんとも言えない表情を浮かべた。

「私たちは家族だよ？お父さんやお母さん達だって皆そう思ってる」

「……家族とは血縁関係にあり、生活を共にする親族集団を指し」

辞書に載っていきそうな、小難しい言葉を並べて自分が家族ではないと説明を شدしたアオイに、なのはは頬を膨らませ、機嫌を損ねながら言い返していた。

「家族なの！家族ってそんなに難しい事じゃないよツ！一緒の家に

暮らして、一緒にご飯を食べる。それが家族だよっ！」

半分泣きそうになりながら訴えかけた。

アオイは泣きそうなのはにうるたえて、助言を与えてくれるユーノを探していた。

「な、何故泣く？ユーノ何処だ、この場合如何すれば良い？……慰める？いやしかし……」

しゃがみ込んでユーノと会話をしながらうるたえる姿を見て、今日はやっぱり珍しい、と何時の間にか涙が引っ込み、笑みが浮かんでいた。

「それで如何したの？さっきかなり苦しそうだったよ」

少し時間を置き落ち着いた頃、アオイがなのはとユーノを呼び、自分が晒されている状況の説明を始めた。

「データが一致しない？」

「正しくは人物能力のデータが明らかに誇張表記されている」

ユーノはデータの重要性を知っている。それがどんな小さい事でも、食い違いがあれば判断に影響を及ぼしたりするのだ。

これだけの情報入手できる人間が、態々誇張にデータを改竄するだろうか。

「それにあの子も守るように言われてるんだよね？」

これも謎の一つである。

両者が争つと予測できるのであれば、両者を守るようには命令は出さないだろう。

もし本当にそんなことをすれば三つ巴だ。

「ああ、彼女。フェ」

「言わないで良いよ」

名前を口にしようとしたアオイをなのはは止めた。

「あの子には私が自分で聞きたいんだ」

「解った。……彼女も自分の護衛の対象者だ。だから、彼女との戦闘は自分は手を出せない」

アオイの返事に満足げに頷くと、今度は首をかしげた。

「そう言えば、アオイ君はどうして苦しんだの？」

元々、何故苦しんでいたのかを聞いた事から始まった話だ、それをまだアオイの口から聞いていない。

その質問にアオイは暫らく黙り込んでいたが、意を決したように口を開いた。

「自分が、本当は何の為に作られたのか、どう言う意図でこの命令が下されたのか………それを知りたくなってしまった」

「えっ？」

アオイ自身もまだ把握しきれていない明らかな過剰兵器群、何かを守ると言うよりも、何かを壊すようなその物々しい重装備がなされているアオイは最近考え始めた。

何かを知りたいと考えるのは、とても大切な事だ。それが自分の記憶なら尚の事。

人間ならば当たり前に有る知識欲、しかし機械である自分は考えてはいけない事だとアオイは語る。

「自分は壊れてしまったのか……」

「そ、そんな事ないっ！」

アオイはなのはの大きな声に驚き、なのはも自分で出した声の大きさに口を押さえる。

「ア、アオイ君はアオイ君だよ。それにそう考えるのはきっと成長したって事だよ、言われたままをやるんじゃないで、自分で考えて何かをやるようになるのに、それはきっと大切な事だよ」

高町家で暮らすうちに、人との繋がりを知ったアオイは感情を学習し始めた。

それは兵器として行動していたらけして得られなかった物、そして兵器には不要な物。

「なのは……………ありがとう」

なのはの真摯な訴えが通じたのか、アオイの今まで無表情だった顔が笑顔になった。

「……………」

「……………なのは？」

「ふえっ！？な、何でもない！」

常に表情を変化させなかったアオイが満面の笑みを浮かべた事で、大きく動揺したなのはは顔を赤くしながらアオイの視線から外れるように顔を背けた。

(び、ビックリした、急に笑うんだもん……………)

「……有り得ない……でも僕たちが会う前に持っていた僕達のデータ……でもそんなことが……？」

ユーノは難しい顔をしながら、ぶつぶつと何かを口ずさんでいた。

「でも……レアスキル、いやロストログアという可能性も……」

考えていたユーノだが、確認のしようが無い事に気が付き、考える事を止めた。

そこで顔を上げたユーノは、顔を赤くし頬を両手で押さえるなものと、またしてもおろおろと動揺しているアオイに目が行った。

「何してるの？二人とも……」

起動記録09（後書き）

……ニコポは普段笑わないから良いんだと自分は思います。
自分、男ですが……

起動記録10（前書き）

更新ですよ。

最近また大きな地震が続いて気が気じゃないばむくん。
それを紛らわす為に小説を書いています！……あれ？何時もと変わら
ない！？

起動記録10

「……………ガ、ガガ出、力低下。危険域到達、しかし、ここでやめる訳には……………」

アオイは今危機的状況に陥っていた。

手の中には暴走したジュエルシールド、周りを見渡せば、陥没した地面に、気を失っているのはとダメージで動けないフェイト。

強引に暴走を押さえ込んでいるが、アオイには封印は出来ない。

「アオイ！もう良いッ！それ以上は、君が壊れてしまう！」

「拒否する。これを離せば、回りの被害は甚大な物となる。両者のどちらかが動けるようになるまで時間を稼ぐ事が最善の筈だ」

「確かに、被害の上ではそうだけど！君が怪我をしたらなのはもその子だつてきつと喜ばないよ！」

それでもアオイはやめようとしなない。

これ以上の被害を出してしまったら、きつとなのはは自分の所為だと悲しむ。

この状況は、二人が一つのジュエルシールドを巡り争った結果、二人の魔力に当てられ、暴走してしまったのが原因だ。それが解っているだけに、アオイは益々止めるわけにはいかなかった。

それが、見ている事しか出来ない自分にできる唯一の事だと思ったから。

「そ、そのまま……抑えていて、下さい……」

ダメージが抜け切っていないのだろうが、身体を引き摺りながら、アオイの傍までより、アオイの手に自ら手を重ねる。

(止まれ、止まれ止まれッ！)

物理的な衝撃は全てアオイが抑えているが、魔力の強大な余波は彼女の身体を痛めつけ続ける。しかし、それが暫らく続くと、徐々に魔力が収まりを見せ始め、そのまま終息していった。

「はぁ、はぁ……」

「所有権は君にある。持って行け」

アオイは終息したのを確認し手を離し、フェイトは肩で息をしながら、アオイの手からジュエルシードを受け取った。

肉体的損傷は見られないが、魔力を限界近くまで使ったためか、緊張の糸が切れそのまま気を失ってしまった。

「治療の必要性あり。早く行け」

「……礼は言わないよ……」

フェイトの使い魔であるアルフは彼女を抱えて、そのまま飛び去った。

「ユーノ、なのはを頼む。自分は腕が動かない」

「当然だよッ！応急処置だけだったのに、あんな無茶をしてッ！」

以前中破まで行った腕は、今は大破しており、応急処置ではどうにもならない様になっていた。
これでは、如何に工学技術を持っていても、この世界では修復は不可能に近いだろう。

「……だが、二人は無事だ」

「……はぁ……全く、君ってヤツは」

「はい、口空けて？あ〜ん」

「……」

それから数日、動かなくなったアオイの腕の代わりに、なのはが食事などの面倒を見ていた。

必ずしも必要と言っわけではない食事に、最初はアオイは拒否したのだが、なのはが泣きそうな顔をしたので、今のような状況になった。

今は破損した腕を取り外し収納、両腕共に肘から先が無かった。これは、移動に壊れた腕では邪魔になるからと言う判断だ。

「ふふっ、本当に仲良しね？」

微笑ましそうにその様子を見ている桃子。

高町家の皆はアオイの怪我を最初に尋ねた時に誤魔化すと、それ以降聞こうとしなかった。

明らかに嘘だと解る筈に言い訳に、形だけの納得を見せ、此方の意志を尊重してくれる。

なのは、そろそろ……

そんな中、ユーノからの念話で何時もの時間であると告げられた。何時も決まった時間に、ジュエルシードの探索に出る三人。

「それじゃ、行って来ます！行こうアオイ君」

なのはに背中を押されながら家を飛び出す。

桃子はそれをにこやかな顔をしながら、見送った。

「なのはッ！アオイッ！」

「うんッ！解ってるッ！」

探索に出かけえて数時間、ジュエルシードの発動を確認した三人は、その現場に駆けつけた。

「樹木に癒着を確認。能力不明」

発動したジュエルシードは、樹に入り込み、まるで意志があるかのように自律行動を始めた。

ユーノが結界を張り、なのはが樹に対峙する。

そしてアオイがなのはを守るようになるのはの背後に立つ。

「……！後方より魔力反応。警戒！」

アオイの反応と同時に樹にスフィアが向っていくが、それを樹が自ら発生させた防御陣によって防がれてしまった。

「フェイトちゃん……」

なのはは彼女を見て思わず呟いていた。
前回のときに名前を知り、彼女の寂しそうな顔が忘れられなかったのだ。

「ブレード展開。根を殲滅する」

アオイは、向ってくる木の根を足の先に発生させたブレードで切り裂いていく。
両の手を使えなくなってもその戦闘力はこの中で抜きん出ている。

「時間は稼ぐ。その間に敵を」

「うん、解ったッ！撃ち抜いて、ディバインッ！」

……Buster……！

「貫け、轟雷ッ！」

……Thunder Smasher……！

彼女たちに迫る根を全てアオイが刈り取り、その隙に二人が示し合
わせたかのように砲撃を放つ。

二つの砲撃をまともに受けた樹はバリアも貫かれそのまま消滅し、
ジュエルシードだけがその場に浮遊する形となった。

「ジュエルシード、シリアル7！」

「封印ッ！」

二人が同時に封印作業に移る。

強烈な発光をした後、そのジュエルシードは、魔力が大人しくなつて封印が成功した。

「……なのは……」

ここから先は自分には手が出せない戦い。

なのはとフェイト、どちらにも譲れない物がある故にその戦い葉避けることが出来ない。

「っ！？これは……転移反応？」

二人が対峙し、ぶつかると言う時に、アオイはこの座標に転移してくる物を感じ取った。

「ストップだッ！ここでの戦闘は危険すぎる」

二人の中心点に転移してきたのは少年。
黒いバリアジャケットに身を包み、なのはのデバイスを掴んで、フ
エイトのデバイスを自らのデバイスで受け止めその場の戦いを一旦
停止させた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだッ！」

「ハラ、オウン………？」

「詳しい事情を聞かせてもらおうか！」

起動記録10(後書き)

今回でやっとクロノ君が登場だ。

ここから物語りは一気にクライマックスに!.....は無理だけど、少しずつやっていきますww

起動記録11（前書き）

お久しぶりの更新！

最近忙しいのであまり他の作品を見に行けない……

これからちよくちよく……できたらいいな

起動記録 11

突然現れた少年、クロノ。

彼は管理局の執務官を名乗り、この場に現れた。

そして、彼はこの場での戦闘行動の危険性を説き、その場を収めようとしていた。

「このまま戦闘行為を続けるなら……っ！」

クロノがそこまで口にした時、彼に向って魔法弾が飛来した。

クロノはそれを危な気無く防ぐと、そちらに注意をむけた。

「撤退するよ、フェイト離れてっ！」

フェイトの使い魔アルフが攻撃を行い、その隙にフェイトがジュエルシードの確保に飛んだ。

「やらせないっ！」

アルフの射撃で粉塵が舞い散る中、それをいち早く察知したクロノは、彼女に向って攻撃を放った。

ジュエルシードだけに気を取られていたフェイトは、その攻撃を察知することができなかった。

「フェイトオオツ!？」

着弾、そして爆炎が彼女の姿を隠す。

煙が晴れると、そこには無傷の彼女といつの間にかフェイトの前に現れたアオイがいた。

「撤退するならば、早く去れ……」

「一応礼だけは言うておくよ、ありがと……。さ、フェイト……」

「うん、……あ、あの、ありがとう」

フェイトはジュエルシールドを掴み、そのまま飛んで去って行くこととする。

「行かせるかつ！ 何ッ!？」

砲撃を放とうとしたクロノは危険を察知し、大きく後退した。

そして、それが正しい事をクロノは自分が立っていた場所を確認し認識した。

両腕がない男が、足にあるブレードで切り付けてきたのだ。

何とか反応できたが、頬を少し切ったようで、一筋の血が流れていた。

「何のつもりだ、これはれっきとした公務執行妨害だぞ！」

「危険レベル5、現状態でも撃退可能と判断。……自分は管理局なる物を知らない。さらに彼女は自分の護衛対象者だ。故に面識の無い人物よりも彼女の身の安全を守ったにすぎない。このまま追うならば攻撃を開始する」

「くっ、今から追っても無駄のようだ。いいだろう、今の件は見逃す、しかし次はないぞ？」

「理解ある人物のようだ。感謝する」

クロノはそのまま話す相手をなのに変えた。

「君たちもだ。すまないが、事情を聞かせてもらおうか」

「はい！」

そのままクロノに案内されるまま、転移を行った。

「もう一組の方は逃げられちゃいましたね」

ここは次元航行船アースラのブリッジ。

ここで、今丁度ロストロギアを確保するクロノの映像が流されていた。

「そう……、まあ戦闘行動は迅速に停止、ロストロギアの確保も終了。良しとしましょう、事情も色々聞けそうだしね」

「そうですね。特に魔力反応のない彼、何を使っているんでしょう？」

「……そうね、質量兵器ではないし、魔力でもない。それについても聞かなきゃいけないわね」

安全を確保したことで、話題は自然に不可思議な存在に移る事になった。

魔力もなく、質量兵器でもない、全く新しい第三の力。

映像で戦闘を見ていただけでも解るほど、その武装は高密度のエネルギーを持っていた。

彼にもリンカーコアが確かに存在する。

しかし、彼が持つ魔力は微弱で精々Cランクが妥当で、あそこまでのエネルギーには成り得ないのだ。

(報告では機械的な反応が濃いと言う事だったけれど、戦闘機人計画が発展したのは数年ほど前だったはず。まだあそこまで歳を重ねた子が戦闘機人であるはずが無い、か……)

艦長までの地位に居ると、色々と、聞きたくも無い黒い話を聞くと
きがある。

戦闘機人の話もまたその関係である。

『ふえええええー！ツ！?』

「あらあら……」

「来たようですね」

艦内中に響くかと言う勢いの叫び声が、ブリッジにまで届き、直ぐ傍まで彼らが居る事を知らせていた。

「さて、事情を詳しく聞きに行きましようか」

「すごいですねえ……この構造、と言うか、融合の仕方。完全に機械と一体化しちゃってますよ」

この場にはなのは達はいない。

事情を聴き終えたなのは達に時間を与え、一度家に帰したのだ。

その時に本人の了承を得て簡易的なスキャンをアオイにかけ、両腕を預かり体を調べるに至った。

「……酷いわね。これは……」

戦闘機人のデータは以前閲覧した事がある。

身体への事も含めてだ。彼は戦闘機人で間違いないが、その構造は、どこまでも機械であり、肉体部分が臓器一つを除いてなかったのだ。本来戦闘機人は人体に身体能力を強化する為の機械部品をインプラントした存在の筈であるが、これでは、機械が体を、ではなく、体が機械を補助しているような物だ。違法研究者の多くは狂っていると思っていたが、これはそれに輪をかけて狂っているとしたか言いようがなかった。

「自分の事が解らないって話でしたけど、本当なんですかね？」

「鵜呑みにする訳にはいかないが、あれは戦闘に特化した機体だ。それが護衛任務など何処か可笑しい……」

クロノが感想を口にした。

数瞬ではあるが対峙したクロノは、アオイの武装が戦闘特化であり、防衛には向かないであろうという仮説を立てていた。

事実、アオイの両腕が無い今の現状に陥った事からも、それが正しいという証拠にもなるはずだ。

「……クロノ、機体、と言う呼び方は控えなさい。あの子にも心は

あるの……」

「あ、はい。失礼しました……」

失言であったと反省を示すクロノ。

そこで通信が入ってきた。通信の相手は、ユーノとアオイの2名からだった。

内容は協力の申し出であったが、フェイト出現時、アオイだけ指揮系統から外れるというものだった。

その申し出を受けると、そのままモニターを切った。

「よかったですか？彼を指揮系統から外しても……」

「外れると言っても、あの黒衣の子が来た時のみだし、それほど大きな問題は無いでしょう。あの子にはなのはさんを当てなければならなくなってしまうたけれど、それはアオイ君が居る段階で、決まってしまうていたような物、他の事は追々考えていきましょう」

何よりも、この申し出を受けなければ、アオイは単独で動き、フェイトの捕縛に向かったクロノと相対する事になるだろう。彼女を守るために。

フェイトの防衛を目的に動くのだから必然と言えよう。

警戒をするだけの戦闘力を秘めているアオイを敵にするよりも、中立の立場にあってくれた方がまだいいだろう。

「でも、やりにくいわね……」

最初から、選択肢など無かったのだ。単純であるが故に相手にし難い。

変な思惑がある訳では無い為、交渉でどうにか、と言った事が出来ないのは痛かった。

純粹な、守るといふ行動が、力を伴った事で彼らの動きを鈍らせる結果となった。

「なのはさんには頑張って貰わなければならないわね」

起動記録11（後書き）

どうだったでしょうか？

今回は良く、思惑とか交渉で使われるシーンですが、カレーにスル
ーの方向で！

だって、アオイ君はなのはちゃん達を守る事にしか動かないから、
思惑関係無しですから！

久し振りだから、ちょこつとテンションがハイ！！

感想ご指摘なんでも待ってます

起動記録12（前書き）

一日二話投稿。

今日は久しぶりに何もなかった休みの日！
と言う事で頑張ってみたww

起動記録 12

臨時的に管理局の指揮下に入ったなのは達は、順調にジュエルシードを集めて行った。

残りのジュエルシードは七つ。

そのどれもが、恐らくは海の中だろうと言う見解が強かった。

それをどのようにして発見、捕獲するかを決める会議を行っている。その結果待ちであったなのは達は、のんびりとその時が来るのを待っていたのだが、そこで、艦内に警戒警報が鳴り響いた。

ジュエルシードの事だろうとなのは達はブリッジに駆け込んでいった。

「フェイトちゃん！あ、あの！私急いで現場に……！」

「その必要はないよ、このまま行けばあの子は自滅する」

モニターの向こうでフェイトが懸命にジュエルシードの封印を試みている様だが、ジュエルシード六つが一度に発動していた。いかに魔力に恵まれたフェイトであつてもそれは人がどうにかできる限界を超えていた。

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい」

「で、でも……！」

助けに行きたいなのは、しかし、それは組織に組み込まれたことで容易にできる事ではなくなってしまった。クロノの判断も現場であるならば十分考えられる範囲の判断であった。

心と、仕事の板挟みのなのは顔を伏せどうすればいいのかを必死で考えているようだった。

「私たちは常に最善の選択をしなければいけないわ。残酷かも知れないけれど、これが現実……」

「それならば、なのはの派遣を提案する」

「えっ？」

その声に顔を上げたなのははすぐ後ろでずっと見守って居たアオイに目を向けた。

「聞いていなかったのか？彼女が力を使い果たしたところで突入する。ジュエルシードも捕獲できる準備を整えてだ。今の段階で行って彼女を助けても、ジュエルシードをみすみす渡すだけに成りかねないんだぞ」

「では、フェイトが力を使い果たすのはどれ程かかる」

「なに………？」

「ジュエルシードの発動。今はまだ良いかもしれないが、このまま暴走を続ければ、周りの施設、住居まで水害となって迫る危険性がある。それによる地域への損害は計り知れない、管理外世界で魔法の事が隠匿されるべきものならば、この危険は回避すべきだと考える」

モニターの向こう側では徐々に暴走の範囲が広がって行っているのが見て取れた。
町に被害が出るのにあまり時間はなさそうだ。

「むっ………」

仮にも法的機関であるならば、目の前で起きている解決可能の事件を解決しないのは後に問題を起こすかもしれない。
結界である程度被害を抑えていたとしても、あの暴走を止めておく事など人にできる事じゃない。それによる被害は広がるし、この不自然な嵐も発見され魔法の存在を仄めかしてしまうかもしれない。
もともと人間的に優しさを持っているクロノやこの艦の人間は人的被害を出してまで事件解決に走ろうとする者はいなかった。

「はあ、仕方ないわね……」

「艦長っ！」

「彼の言う事も一理あるわ。私たちは、魔法の存在を管理外世界に知らせる訳にはいかない。それに人的被害の可能性も考えると早急に解決する事が必要よ」

方針はジュエルシードの早急なる確保で纏まった。
なのは、ユーノ、アオイの三名は転送装置に乗ると、そのまま結界内部へと飛んだ。

「本当によかったんですか？」

「彼女の目的がジュエルシードの全ての確保であるなら、こちらが確保している物も欲しているはず。此処で盗られてしまう場合は痛手だけれど、必ず取り戻す機会はあるわ」

そして、と付け足して、この場での被害を考え、妥当であるという決断を下した。

この事件解決の為だけに無関係な市民を巻き込んでいいはずがないのだから。

「……全力戦闘には耐えられないが邪魔にはならないようだ」

しばらく渡していた両腕が修復され戻ってきていた。
完全な修復は不可能であったが、軽い戦闘程度ならば問題は無かった。

「アオイっ、それにそっちの人も！二つずつ動きを封じるよ！」

ユーノの指示でアオイ、ユーノ、アルフの三人は二つずつ拘束し、
なのはとフェイトの封印砲を撃たれるまで待っていた。

そして六つを二人で一気に封印まで持ち込んだ。

大威力収束砲、その年齢似合わない派手な威力の攻撃にアースラの
スタッフは啞然としていた。

「終わったね……」

ジュエルシードの暴走は止められた。

アオイは周辺警戒に移り、ユーノとアルフはジュエルシードを眺めながらにらみ合いをしていた。

そしてなのは達は……

「友達に、なりたんだ……」

「っ……っ！」

フェイトと向かい合ったなのはは、自身の中に燻ぶっていた思いをありのまま告げていた。

友達になりたい、それは簡単であると同時に、とても難しい事。戦っていた二人だ、それは尚難しいだろう。

「わたし……っ！……母さん？」

何かを口にしようとしたフェイトだが、何かを感じて空を仰ぎ見ていた。

仰ぎ見ていた数瞬後、激しい雷がまるで無防備なフェイトに目掛けて落ちてきた。

「ライドインパルス！」

危険を感知し、能力を使って近づいたアオイであったが、雷の範囲外に逃すだけの時間を稼げなかった。

仕方なく、できるだけ自分にもみ雷が当たるように体で覆い、けしてフェイトに触れなかった。

「ぐっ！？……雷で計器類が、エラ、-を、出して、保て、な……」

Sランクの魔法、それも弱点と言える雷を受けてそのまま飛ぶ事が出来ずに落下していくアオイ。

それだけで壊れるほど柔な作りではないが、まともに受けた為に、数分の回復が必要としていた。

フェイトも直撃を免れるも、体が痺れ動きが取れなくなっていた。

『ふふふっ、っ……に完成……れで……最高の……』

(なんだこの映像は……?)

落下しながら、アオイの頭の中にはある映像が流れていた。

それは失われていたと思われていた、記憶のかげら。

自身を楽しげに見つめている男と、その周りで待機している自分と似た機体たち。

『これで……私が……求め……システム……』

サルベージでき無かったデータが、先程の雷のショックで少しだけ覗かせたのだ。

その映像に戸惑っているうちに、フェイトはアルフに連れられてその場から撤退して行った。

「この男が、自分を作った……」

記憶は断片的な内容が無いものだったが、自分の作り主の顔だけは知ることができた。

そこから、自分の作られた理由を知る事が出来るかも知れない。

この件が片付いたら、アオイはそれについての調べに着手すると決めた。

起動記録12（後書き）

どうだったでしょうか？

話の展開的には無印で切っ掛け、A、Sで思い出し、STSで決着、
という流れで考えてるんで多分無印編ではスカさんは此処だけです。

感想ご指摘なんでも待ってます。

起動記録13（前書き）

更新です。

心の成長とか難しすぎる、全然書けてる気がしないW勉強だ。

起動記録 13

「……で、君は帰らないのかい？」

「なのはにはユーノが付いている。危険は少ないだろう」

あの事件の後、すぐには動けないだろうという判断のもと、なのは達は一時帰宅を許可され、学校に通っている。アオイはそれに同行せずアースラに残っていた。

艦内は重要な場所以外、自由とされているが、自発的行動をあまりしないアオイは背丈的になのはに近かったクロノの後をくっ付いて行動していた。

「今自分の能力は半分ほどまで低減されている。これは今後任務をこなす上で、障害になる恐れがある。今のうちに、最低でも、七割程度まで性能の回復をしたい」

そのための設備があるこの最新鋭艦アースラに残り修理を依頼したのだった。

「そうか、でもな……。そんなに落ち着きがなかったら、こちらとしてみ気になってしょうがないんだが？」

「……………む」

食堂でクロノと会話をしていたアオイは食事を目の前にしながら、
落ち着かず一向に手をつけようとしていなかった。

「それにしても、君は食事をする必要はあるのか？見たデータだけ
だと、その必要はなかった気がしたが……………」

自分の食事を食べながら、気になっていた事を聞いたクロノだが、
それを聞いたアオイは動きが止まった。少しして動きを取り戻した
アオイはゆっくりと手に持っていた食器を下した。

「……………。この時間は、いつもなのはと食事を摂っていた為、気が付
かなかった……………。そうだな、自分には必ずしも必要では無かった」

そう言うと、立ち上がり食事を片付けようとする。

「いや、ダメと言っている訳じゃないんだが……………、それにそこまで
準備していた物を捨てる訳にもいかないだろう」

「しかし……………」

「そこまで気にするなら、僕に付きあつて、と言つ事で此処に居てくれ。このままだと僕が追い出したみたいじゃないか」

「……了解した」

「調子が狂うな……。まあ、食事なんかは、一人よりも二人の方がおいしいというのは定番か」

二人が黙って食事をしていたそこだけ、静かな空間が出来上がっていた。

「お二人さん！そろつてお食事？どこの兄弟かと思つちやつたよ」

その場にエイミーが食事を持って現れた。

周りからは体格差からか、兄弟のように見えたていたようだ。

「一応聞いておくが、どつちが兄だ……？」

「そりゃ、体格差から言つてクロノ君が弟でしょ」

エイミーはクロノの隣に座りながら口にし、クロノはそれを聞いて溜息を零した。

「まったく、僕はこんなに手のかかる兄なんて欲しくないぞ。……
どっちかと言うと僕が兄だろう」

「兄弟……か」

クロノのセリフを聞いたアオイは無表情な顔で、クロノを見つめた。

「な、なんだ？何か気に障ったか？」

「いや、兄弟と言う物が、いまだ理解しきれていないのでどういう物なのだろうかと……」

高町家の暮らしの中で、家族、と言う物をおぼろげながら理解して来たアオイであるが、そこから派生する物になると、大して意味は違う訳でもないのにまた考え込んでしまうのだ。

「僕も兄弟がいる訳じゃないから、なにが兄弟か、なんて偉そうに言えないけど、君となのはの関係のような物だと思う。なのはには兄弟もいるし、解りやすいだろ、なのはは次女だな」

「じ、じよ？初めて聞く単語だ。詳しく聞いても良いだろうか？」

「……家族の意味は知っているのに、兄弟の呼ばれ方を知らないなんて、おかしな所で、記憶が欠落しているな」

「なんて言うんだろう、兄弟の順番を示す呼び名かな？男の子なら長男、次男。女の子なら長女、次女って言う感じで」

「成るほど、理解した。が、自分となのはは兄弟ではない。護衛と護衛対象者だ」

エイミイは、アオイの言葉を聞いて何かを考えると、それをそのまま口にした。

「彼女の為に何かしたいって、今まで一回も思わなかった？仕事だから守らなきゃって考えじゃなくて、なのはちゃんだから守りたいって気持ち……」

二人のセリフを、自分の中で整理していく。
任務としてなのはを守ってきたアオイ。しかし、なのはに家族だと言ってもらった時、彼の中で何か温かい気持ちが生えたのは確かなのだ。

「ある、よつな気がする……」

その時思った彼女を守らなくてはと言う頭に過った言葉が、任務としての物なのか、または彼らの言う感情であるのかは解らない。だがアオイは、その時の事が感情であればいいと口には出さないが感じていた。

「だったら、その気持ち大切にすれば、そのうち解るよ。っと、そろそろアオイ君の修理の時間じゃないの？話だと、かなり時間が掛かるみたいだし早く行かなきゃ」

「そのようだ。では自分はこれより技術班と合流し、処置を受けてくる」

アオイの体を見た技術班たちはその構造の謎から、丸一日以上は掛かるだろうと言っていた。

戦力として、かなりの力を保持するアオイの不調は今後の作戦で大きく響いてくるかもしれない。

何においても優先して修理するようにいわれていた。

「大変だね。記憶が無いのって……」

「いや、彼の場合は記憶がある無しに関係ないだろう。感情を学ぼうとしてるんだから」

食器を片づけ、食堂の出口に向かうアオイの後姿を見ながら、二人はアオイの事話していた。

「……良い子だね、アオイ君。こうして話してみても、ちょっと変わった人ってただかもんね」

「融通は利かないし、後を追いかけてくるので大変だがな」

「とかなんとか言っちゃって。まんざらでもなかったんじゃないの？わざと案内するみたいにあちこち歩き回ってたみたいだし……」

アオイがくっついて来るのを知ったクロノは、説明はしないが、かなり遠回りをしながら、あらゆる場所を歩き食堂に移動していた。

「べ、別にそう言う訳じゃ……」

「あら？照れてるの？」

「からかうな！……と、ブリッジからか？はい」

クロノの元に新たな連絡が入った。

フェイトの使い魔、アルフが傷だらけの状態で保護されている所を
発見したというものだった。

「あちゃあ〜……、アオイ君がちょうど時間を取られてる時に来ち
やったか」

「戦力としての期待はしているが、あのフェイトと言う少女の対処
には向かえさせられないからちょうど良いだろう。問題はその後と
だ、彼女の後ろに控える人物と事を構えた時に間に合えばいい」

「またそんなこと言っちゃって……」

「……良いから行くぞ。事情を聞くんだけ、記録を頼むぞ」

「はあ〜い」

アルフの事情を聞き、ここから事態は動き出す。

そして、なのははフェイトとの対決を望み、クロノは許可を出した。
博打に近いが、そこから敵の本拠地を突き止められる可能性が高い
ので、それほど大損する物ではない。

不安と言えばアオイが眠りに付いた事だが、それは一日、彼女たち
の戦いの途中には目を醒ますだろう。
事件の決着は刻一刻と近づいていた。

起動記録13(後書き)

感想ご指摘なんでもどうぞ！

自分メンタル弱いんで、あまりきつい事言われると折れますww

起動記録14（前書き）

更新です。

今回難しかった……何がと言つと、本編で一生懸命書いたつもり。
ホントに難しい！

起動記録14

機械の作動する音と共に、アオイは目を醒ました。

そこで、自分が機械と繋がっているのを確認すると、そのままアクセスを行いデータを収集し始めた。

目が覚めた時に一番最初にする行動が、何時も決まって情報の収集だった。

「……なぜ、なのは達が戦っているんだ」

アースラの艦内の情報をあらかじめ入れたアオイは今がどういう状況にあるのかを理解した。

情報の無断での閲覧などは犯罪だが、これは予め許可を出されているため問題にはならない。

リアルタイムでの戦いの映像を見たアオイは、その場からすぐに立ち上がると、そのままブリッジに急いだ。時間としてはアオイが眠りに就いてから、二十時間ほどだが、自体は大きく変動していた。

「現在手にしている両者のジュエルシードをかけて戦闘、か。実力が伯仲している者同士の戦い、運の要素に左右されそうだ」

どんな結果になろうとも、アオイのする事は二人の安全の確保。

急ぎ現場に駆けつけて、以前あった雷を防ぐのが仕事になるだろう。

「失礼する。このまま現場に飛ぶ為、転移装置を起動させる」

ブリッジに辿り着いたアオイはそのまま転移装置に飛びつき、自分で起動させ飛んだ。

それと同じく、なのは達の戦いも、どうやら決着を迎えているようだった。

「目が覚めたのね。あちらも決着が付いたようだし、タイミングとしては完璧ね」

「よかったですか？勝手に行かせて……」

「あの子がいる時点で、私たちには彼を止める事は出来ないし、今飛んだのもなのはさんが勝利した今、おそらく彼女の雷が降ってくる。もし、今なのはさん達にもしもの事があつたら、万が一の場合に対処が取り辛くなるわ」

そしてモニターに視線を戻した。

そこには黒雲が空を覆っていた。

「来たみたいね……」

「ロック……、ファイアツ！」

フェイトに降り注ぐようとしている雷雲の魔力を感知したアオイは、その場からでは防御に間に合わないと判断し、その場から雷雲を撃ち貫いた。

雲に穴を空ける所まで行ったが、完全に消滅させるまでには至らなかった。

「……消滅させるだけの出力は出せなかったか。だが狙いはそれたはず」

雷が降り、フェイトのすぐ脇を過ぎ去る。

だが、決着が付いた時に、外に出たジュエルシードはそのまま空間の歪みに吸い込まれていった。

いまだダメージの抜けきらないフェイトは、その空間をただぼんやりと眺めていた。

『なのはさん、そのまま彼女をアースラに。治療もあるし、なのはさんも疲れたでしょう?』

なのははリンディの言葉に従いフェイトを担いだまま、アースラに転送される。

アオイは、その場に佇み、転移する直前のフェイトの暗い顔を思い出していた。

しばらく動かなかったアオイ。だが、状況は動き続けている。

今まさにプレシアを捕まえようと、アースラの武装局員が本拠地に突入して行った。

「……家族では無いのだろうか?」

口から出た疑問。

目が覚めた時に得た情報、アルフの話したフェイトとプレシアの関係。

「家族とは、互いに助け合うものではないのだろうか?なぜ彼女は苦しみ、なぜ彼女は娘を傷つける。今の雷も、確実に直撃していたコースだ。家族とは……なんだ?」

自分と言う人形でも、なのはは家族だと言ってくれた。

血縁でも、ましてや人でもない自分をだ。

いまだその場から動かずに、状況をモニター越しにリアルタイムで見続けているアオイの耳に、プレシア本人からフェイトの事や、プ

レシアがやるつもりとしている事のすべてが明らかにされていた。

「……………それでも……………自分にとって家族とは……………」

簡単のようで難しい問題。

何をすれば家族で、どこからが他人なのか、全く答えのない問題だが、アオイは一つの答えに辿り着いた。

「何をしてでも、護りたいと思う人たちだ。これは命令では無く、自分の意志だと信じたい。何故なら……………」

アオイの握っていた手は、力の入れ過ぎで軋む音を立てていた。

「自分は、フェイトを傷つけたプレシア・テストロッサに激しい怒りを覚えている」

緊急事態であり、最大戦力であるアオイだが、しばらく時間をもらいフェイトの様子を見に来ていた。

「……フェイト、失礼しても良いだろうか？」

「……………」

フェイトが眠らされている部屋。

そこにはまるで魂の抜けた人形のように、心を閉ざしたフェイトがいた。

プレシアの語った事実には、心が耐えきれなかったのだろう。

「自分は、この事件に携わり、いろいろな事を学んだ」

反応はない、それでもアオイは気にした様子もなく話し続ける。

「その中で、家族とは何か、と言うのが自分が学んだ中で一番大切なものだった気がする」

一瞬の反応。

「家族を知れた事で、自分は感情を学ぶ事ができた。守る事の大切さを理解できた。しかし、家族と言つのはどこまでも曖昧だ」

今度は光のない瞳が、アオイをとらえた。

「その捉え方は人によって違う。自分もついさっきまで、なにが家族であるのか、家族とは何かを悩んでいた。……でも、そんな周りの人間が考える家族を気にする必要なかったんだと気が付いた」

フェイトは表情を変えずに、ただアオイを見続ける。

「自分がそうだと考えているなら、それはもう家族なのだろう。血縁が家族だと考える人間もいる、なのはの様に考えてくれる者もいる、……プレシアのように、ただ一人を家族だという人間もいる」

最後の部分で、視線が逸れた。

「だから決めた。相手が違うと言っても、自分にとってその相手が守りたいと思う相手であれば、それは自分にとって家族であると。いくら否定されようと、自分はそう信じ続ける」

上を向いたままのフェイトの瞳から、一筋の涙が流れる。

「自分はただ、自分の考えを言っただけに過ぎない。それをどう解釈するかはフェイト、君次第だ。……時間を取らせた。自分に行く」
静かに扉から出ていくアオイと外で待機していたアルフがそのまま現地に向かっていく。
また一人になり、静かになった部屋でフェイトは先程の言葉を考える。

(母さんにとって私は人形で……いらぬ子で……)

プレシアの言葉を思い出し目を瞑ると、また涙が流れる。

(でも、私にとっては……母さんは……)

次に目を開いた時には瞳に光が宿っていた。

「母さんは、私にとってどこまでいっても母さんだよ」

次の瞬間には、瞳に力が宿っていた。

「行くところ、バルディッシュ。ここから始める為に……」

起動記録14（後書き）

語らせてしまった……。

機械らしくないか？まだこれだけ語らせるのは感情を学んでる途中で早かったかな？とかいろいろ考えたけど、まあいいか！w

それでは、感想お待ちしています。

起動記録15(前書き)

更新です。

起動記録15

「数が多過ぎるッ！これじゃ、駆動炉に辿り着くまでにどれくらいかかるか……」

ユーノが拘束魔法でなのは達のサポートをしながら、遅々として進まない現状に焦りを見せ始めていた。

此処は大きな螺旋階段で占められた空間、上からやってきたなのは達を追うように、上から新しい機械兵たちが現れ、立ちほだかる様に下からも襲いかかってくる。

「……数が多いだけならばまだ良いが、この機械兵たちはAランク相当だ。だが敵の要塞だ、これくらいは想定範囲内だろう」

なのはの背後で、なのはの死角を埋めるように周りの機械兵を刈っていくアオイ。

その後、何かを探すように周りに視線を向けると、当たりを付け砲撃モードで壁を撃ちぬいた。

その壁の向こう側から大型の機械兵が、崩れ落ちてきた。

「しかし、そろそろ駆動炉に到達しなければ、被害が大きくなると予想される。……なのは、自分がここに残り、敵の殲滅をする。先に進め」

「そ、そんな！数が多過ぎるよ！幾らなんでもこの数を一人でなんて……」

「なのはッ！！後ろ！」

なのはの背後で、ユーノが拘束していた機械兵の一体が力尽くで拘束を破り、なのはに向かい武器を振りかぶっていた。

アオイは予め予測していたのか、慌てる事無く天を仰いだ。

「フェイトも来た」

上空からの激しい雷光。

なのはに攻撃を加えようとした機械兵は、その雷光により爆散し、当たりを煙で包み込む。

フェイトはその煙を切り開くように下りてくるとなのはに向き合った。

「フェイトちゃんッ！」

なのははその助っ人の登場に喜び、アルフは主の復活に涙ながらに飛びついた。

ユーノはホッと胸をなでおろし、アオイは警戒を怠らない。

その後、二三言葉を交わすと、アオイからの提案が再度為された。

「……時間が無い、魔力の温存も必要。このままのんびりして
は被害が広がるばかりだ。なのはは駆動炉を破壊し、フェイトは母
親の元に行く。ならば自分は君達の道を切り開く」

「でも、さっきも言ったけど、この数を一人でなんて無理だよ
！フェイトちゃんも来た、みんな一緒ならもっと早く行けるから、
このまま進もう？」

「そうです。これは一人でどうにかなる数じゃありません。だから
……」

なのはとフェイトの否定的な言葉、なのは達だけではない。

ユーノもアルフも、さらには作戦指揮を代理で行っているエイミイ
もその提案を吞めずにいた。

今いる螺旋階段を全て埋め尽くすかのような機械兵の群れ、数十機
ですら手間取るほど手強かったのに、千に届くかというそれを一人
で足止めできるとは思えなかった。

「なのは、自分は大丈夫だ。君達が居なくなれば、いつでも逃げら
れる。それに自分は殲滅と言った……」

近くにいたなのはとフェイトの頭を優しく撫で、まだぎこちないが
笑って見せた。

そして、先に進むようにその背を押した。

「自分はこれらをすべて破壊し、君達を助けに行く。君達がいる限り、自分は君達を守るために稼働し続ける。だから、進め!!」

渋々とだが、笑みを浮かべたアオイを信じて、なのは達はその場を後にしていく。

ユーノはアオイの近くに来ると、小さな声でアオイに訪ねた。

「どれくらいで追いつく?」

アオイを信じて、ユーノはけして勝てるのか?とは聞かない。聞くのは、自分達との合流時間、それに対してアオイは答える。

「なのは達を追わないように、すべて破壊する必要がある。だが、それほど掛かる敵でもないだろう。必ず、追いつく」

この世に絶対はない。計算で動く様に作られたアオイは、今まで数字でしか物事を判断してこなかった。そのため、確定的な証拠が無ければ、断言したりした事など無かった。

しかし、今この場において、何の情報も無く、確率しか存在しない場において、必ず、と断定して見せた。

その機械らしくない言葉に、ユーノはいつもと同じ笑みを浮かべて見せて、ハイタッチをアオイと交わす。

「よろしく!」

「……」

ユーノを最後に、辺りは静けさを取り戻す。

「……アースラの監視はなし。なのは達もこの場から離れ、自分の存在を視認できる位置にはいない」

声に出し確認する。それは今や癖になっているとも言える。
尚も状況を整理していく。

「……機能は、七割起動を確認。敵性反応963体を確認、徐々に増加中」

敵が動き出す。何十体かが一気に押し寄せ、数で押しつぶすような戦略を取ってきた。
それを巨体である敵の機体の間を抜け飛行し、振り向き様に数体破壊する。

「……武装確認。……全ての問題をクリア。IS『D』発動ッ!」

アオイの姿が魔法陣に近いが、それとは全く違うサークルに包まれた。

蘇ってきた記憶の中にあつた彼独自の機能。自身に内包された強力な兵器。

破壊能力が極めて高い武装、発動すればその効果範囲にいる者は破壊し尽くす事ができるだろう能力。

『IS』彼ら戦闘機人が持つ個別の能力である。

今まで彼が使ってきたISは所謂彼の物ではない紛い物、この『D』を搭載させた時に残った空き容量に、今までの研究の成果を詰め込んだだけだったのだ。

「…………『D』発動を確認」

サークルが消えると、そこには体を武装で覆われたアオイの姿が。そして徐に右腕を上げる。

「…………座標固定、圧縮」

次の瞬間に大きな音を立てて、アオイの腕の先にあつた螺旋階段とそこにいた筈の敵機械兵群が消滅していた。

よく目を凝らすと辛うじて小さく纏まつた機械の塊が見て取れる。

「……座標指定、イグニッション」

そして次に左腕を上げると、その先にいた敵機械兵が爆散した。

「……『D』機能に問題なし」

その場に人間がいたら、その異様な光景に逃げだしていただろう。だが、この場にいるのは機械の群れ、それに脅威を感じる事無く、ただ敵に向かって突進を繰り返すだけだった。

両腕を下ろし、次は蹴りの要領で足を振りぬいた。敵機械兵は吹き飛ばされ、圧力でつぶされていた。

「……ここには誰もいない。居るのは自分と心を持たぬ機械のみ。この場所であれば、なのは達を巻き込んでしまう恐れもない」

背中から、翼のような光が広がり、アオイは宙を飛ぶ。

「この能力は使用者にも多大な損害をもたらすが、この場を殲滅するのには、そこまでの時間は必要ではないだろう」

頭の中で、恐ろしい勢いで高度演算を行いながら、襲ってくる敵機械兵を、何の苦もなく破壊していく。

足で潰し、腕で消滅させ、爆散させていき、翼で切り刻む。

「機械の兵よ、我が同胞よ。此処が貴様らのジャンク場だ」

アオイが動く。動きを止めるまでの時間はわずか数分。

そして最後に、殊更大きな光が辺りを包みこむと、原形を留めている機体は存在していない。

あっという間の出来事だった。

「……殲滅完了」

もはや螺旋階段すら見当たらないその空間で、アオイは自分の火力の大きさに疑問を抱きながらも、機械の残骸を残し、その場から消えていく。

その場はまさにジャンク場、機械の墓場が広がるのみだった。

起動記録15（後書き）

どうだったでしょうか？

アオイ君のISは武装展開で、スカさんが作った凶悪な兵器群を操ります。

細かいアオイ君の武装の設定などは、後で上げようと思います。とりあえず、無印が終わった後で……

起動記録16（前書き）

書けました。

今回は今までで一番長いかな？

それでは本編をお楽しみください。

起動記録16

「……………母さん」

フェイトは母親プレシアがいる最下層までたどり着いた。そこにはすでに、クロノが傷つきながらも到着していた。クロノとの会話をしていたプレシアが口を抑え不意に咳き込み出し、その手を真っ赤に染めていた。

「母さんっ……………！」

尋常では無い様子に、フェイトは焦りながら駆け寄って行った。しかし、それをプレシアが一睨みし、一言口にした途端止まってしまった。

165

「何をしに来たの……………？」

「……………っ！」

血走った眼で忌々しそうに顔を向けるプレシア。

「消えなさい。もうあなたには用は無いわ……………」

「……あなたに、言いたい事があつてきました……」

吐き捨てる様に口にするプレシアに、しかし、今度は全く動揺するそぶりを見せず、さらに何かを伝えようとするフェイト。それを一瞬いぶかしんだプレシアだが、次にフェイトが放った言葉で、その表情は驚愕に変わった。

「私は……アリシア・テストロツサじゃありません。あなたが作った人形なのかもしれません。でも私は、フェイト・テストロツサはあなたに生み出してもらつて、育ててもらつた、あなたの娘です！」

はっきりとした言葉でそれを口にしたフェイトに驚きを見せたが、それも一瞬で、また表情が暗いものへと戻つてしまふ。

「あなたの娘です！」

反抗など一度もしなかったフェイト。

その初めての反抗がこの場である事に唇をかみしめる。

「ふふふっ、あははははっ！……だから何？今更あなたを娘と思えと言っの？」

そう、今更だ。既に手遅れだ、体を病魔に蝕まれ、それでもアリシアを蘇らせる為に、罪悪感などとうに捨てたのだから。今このような気持ちを抱くのはいけないのだ。

「……あなたが、それを望むなら……それを望むなら、私はどんな人からも、どんな出来事からもあなたを守る」

なのにこの子は、私を揺さぶる。

突き放さなければいけない、今更この子に、母親らしい事などできる筈もない……。

（ああ、何だか、悲しいわね……、でも、もう決めた事……）

それは数時間前まで遡る。

アオイは数時間も前に、座標の特定を完了させ、誰にも知られる事無く、コンタクトをとる事に成功した。それから簡単だ、アオイは理論付けなどしようともせず、学んだ感情のままの事を口にし、プレシアもアリシアだけ居れば良いと言う、凝り固まった意見同士がぶつかりすぐに口論まで発展する。

「彼女は人形では無い！」

彼にとって初めてかもしれない激しい叫び。

プレシアのセリフに体の回路が熱くなるのを感じていた。

「彼女はあなたの血を受け継ぐれつきとしたあなたの娘だ。あなたの長女が持ち得なかったあなたと同じ魔法の才能を持って生まれたテストロッサ家の次女だ」

何に反応したのか、プレシアは戸惑いの表情を浮かべていた。

「それが、それがなんだと言うの！？私はアリシアさえ居てくれればよかった……！魔法の才能なんていら……ただ居てくれればよかったのよ……！……そんな作りものじゃ無く……！」

「自分は人形だ」

プレシアの話を無視するように、アオイは独白する。

「だが、こんな自分でも家族と呼んでくれる人がいた！だからあなたの心ひとつだったはずだ。彼女をアリシア・テストロツサの妹として接する事もできた。フェイトも確実にあなたの血を継いでいるのだから……」

感情を少し学び、子供のような純粋な問いを向けるアオイに、プレシアは頭を抱え始めた。

「そんな事……そんな事あなたに言われるまでもない……でも、今更できる訳無いのよ！！」

「あなたはどこにも行かせない！フェイトを守るためにも！」

そこで通信は終わった。

荒い息を整えながら、どつしりと腰を下ろすプレシア。最下層にて、準備を始めていたが、アオイの言葉が頭の中で何度も繰り返していた。

やがて、息を整え終わると、アリシアが眠る生体ポッドに歩み寄りて行った。

「今まで忘れていたわ……。あなたが欲しがっていた妹。……。あなたは、こんな私を……。怒るかしら、ね？」

涙声になりながら、アリシアが望んでいた事を思い出し、罪悪感が蘇る。

「あなたは優しいから、私がフェイトに……。酷い事をしていて怒るわね……」

今まで、フェイトの事を娘などと思っていなかった筈なのに、アオイの次女、妹、という数々の発言にまるでパズルが組み合わさるかのように、アリシアが最後に望んだプレゼントの事を思い出していた。

「あなたも無茶な事をお願いするんだもの……。妹だなんて……。でも……。ごほッごほッ」

口に付いた血を拭う。

あの通信からしばらくして、追い払った管理局員とは別の局員と他二人が侵入してきた。

それは制服に身を包んだ少年と、民族衣装らしき物を着ている少年、さらにフェイトを常に気遣って居た少女がいた。

「もつと早く、気付いていたら……可能性だけの場所を求めずに済んだのかしら……でもわたしは、既に手遅れな場所にいる」

アリシアが眠るポッドに体を預け、そのガラスを擦りながら静かに涙を流した。

「……ごめんなさいね、アリシア。今まであなたを蘇らせる事ばかり考えていたけど、諦めなきゃいけないみたい……。こんな我儘な母さんを、あなたは怒るかしら？それとも、褒めてくれるかしら……？」

そこまで話をし終わると、激しい震動が彼女が今いる場所にも届いた。

「でも、あなたは一人ぼっちにはさせないから大丈夫。母さんはあなたのもとに……」

「私があなただの娘だからじゃない。あなたが私の母さんだから！」

そのセリフに、プレシアは一瞬、誰にも気が付かれない程度に笑みを浮かべ、今まで感じた事が無いほどフェイトの事が愛おしく感じてしまっていた。

「くだらないわ……」

だがそれでも、彼女は既に決めた。

犯罪者の母親と生きる今では無く、強要された悲しい娘としての世間からの反発を弱めた未来、まだ長い人生を与えると。

「……っ！」

フェイトの顔が悲しみで歪む。

（今までの事を見ていれば解る。この子は優しい。だから私が拒絶し続けても、この子は変わらず私を慕うだろう。でもそれじゃ、意味が無いのよ。忘れる事が出来なくなろうと、私は今！ここでッ！）

プレシアが手に持っていた杖で床を叩く。

そこから魔法陣が形成され、建物全体が大きく揺れ始めた。

(これで……あとはこのまま落ちれば……)

床は崩れ、崩壊が進む。落ちる時が来るのを目を閉じて待っていた。そしてすぐにプレシアが立っている場所も崩れて行った。

「母さんっ!!」

フェイトの大きな叫ぶ声。

最後にその姿を目に焼き付けようと目を開けて彼女を見ると、すぐ目の前に彼女の顔があった。

「なっ!?!何をしているの!?!早くあつちに!!くっ!!」

崩れて行く足場。目の前にいるフェイト。

プレシアは焦り、自分では気が付いていないが隠していたのに彼女の身を守ろうと抱きしめていた。

しかし、既に底は虚数空間に入り始めていた。

「もう、魔法がっ!?!」

焦る。フェイトだけでも助けなくては。焦る。何か手は無いか。焦る。

プレシアが必死に考えている姿を見たフェイトは、その体を力強く抱きしめた。

「母さん、最後だったけど、やっぱり優しい……。ありがとう……」

「フェイト……」

諦めたわけではない。しかしプレシアは、今、どうしても彼女を抱きしめてあげたかった。

「……行か、せて……。たまるかああーッ!!」

けたたましい音を鳴らしながら、上空から誰かが落ちてきた。

それは燐光を発しながら、物凄いスピードでプレシアとフェイトの二人を持ち上げた。

「あ、あなた!?!なぜここで飛べるの!?!」

「自分の使用する力は、魔法ではなく科学だ。よって魔法とは違い、この場で阻害されない」

プレシアは助かった事よりもまずそこに気が向く。
研究者で有った名残りだろうか。

「アオイ……さん？どうして……」

「言った筈だ。自分は君たちを守ると、そしてあなたは何処にも行かせないとも言った」

帰還する為に上昇を続けるアオイ。

上から落ちてくる瓦礫を避けながら、しっかりと両脇に二人を抱える。

しかし、上昇が急に止まり停滞し始めた。

「……こんなところで、だと……！」

苦しげな顔を浮かべるアオイ。

「どうしたの！」

「……出力が低下し始めた。このままでは上がれない。此処から両名を投げ、クロノの居る場所まで飛ばす、対シヨック防御を」

「あなたは……?」

「ここからあそこまで投げるのにかなりの力を消費する。恐らく上げれる事は無いだろう」

「そ、そんな!？」

アオイの不調の原因。

それは螺旋回廊の間で使った能力の副作用だろう。全開時ならば、こんな状況にならないが、七割では他の機器に負荷が掛かりすぎたようだ。

大きな瓦礫に着地する。そこはちょうど虚数空間と通常空間の境目、ここで魔法の使用はできるが、不安定の為飛ぶ事が出来ない。逆さまになって下に飛ぶことだってある。そもそも、魔力が皆、限界だ。ゆっくりと降下しているが、投げるには足を地に置いて居た方が効率が良い。

「フェイトだけなら、抱えてあそこまで上がれるかしら?」

「不可能だ。そもそも重量の問題では無く、全ての機器が急速に停止し始めているのが原因だ」

プレシアの質問に、何の疑問も抱かずに可能性だけを提示するアオイ。
それを聞いたプレシアは、ふっと笑みを浮かべると、フェイトに抱きついた。

「もう、嘘は付けないわね……。フェイト、愛してるわ……。やっと、愛する事が出来たわ……」

「か、母さん……。？……。い、いや、いやだよ、そんな……。やっと本当の親子に……」

フェイトは嬉しかった。だが今この場で言う意味を考え、何かに辿り着いたのか、目に涙を溜めて、いやいやと駄々をこねる様に首を振る。

「アオイ君、だったかしら？」

「なんだ？自分は目標設定をしている、もうしばらく待っていてくれ。……。よし、これならばいいだろう、フェイト」

フェイトを投げる為に抱き抱える。

「その必要はないわ……。アオイ君、何かを救うには、何かを捨てな

ければならないのよ……」

「何をッ

」

言葉の途中で視界がぶれる。

フェイトを強く抱きしめたまま、自分の力では無い物に強打され浮上する。

「母さん……ッ!!」

フェイトの叫びでようやく謎を理解した。

プレシアが、自身の魔法で、フェイトを掴むアオイを吹き飛ばしたのだ。

虚数空間と通常空間の狭間でこれだけのコントロールを見せる彼女は流石だと言える。

「さようなら……。最後にあなたを抱きしめられて良かったわ……」

事件は解決した。軽傷者数名、事件の首謀者プレシア・テストロッサは虚数空間にて行方不明と書類には記された。公式記録ではフェイトがした行動は強要され行った事であるとして、情状酌量の余地ありと見なされ、映像証拠もあり、それほど重い罪を受ける事は無いだろうとクロノは語った。しかし、彼女が最後に見せた母親としての優しさは、フェイトの中にしっかりと刻まれる事となった。

起動記録16（後書き）

……結局プレシアさんは居なくなりました。

これに不満の方もいるかもしれませんが、自分としては、あそこからのリカバリーはこれ以上不可と判断し、プレシアさんの生死は原作通りとなりました。

次回はいよいよ無印最終です。このままA・S編までがんばります！

起動記録17（前書き）

お久しぶりです。

少しの間失踪してました。主に病院で……

ポチポチとキーを押しながら、何とか無印完結。あっさりしたもの
です。

では本編をお楽しみください。

起動記録 17

アオイは一人、海を見渡せる位置に立ち、なのは達が会話を終わらせるのを待っていた。

そう、今日はなのはとフェイトの別れの日。

フェイトは今日よりアースラで暮らし、今回の事件の裁判まで待つこととなる。

クロノの話では、フェイトはそれほど重い罪に問われる事は無いだろう。

首謀者であるプレシアの虚数空間への身投げ。

映像証拠、現状証拠など諸々の事を考えるとフェイトは加害者よりも被害者である事を主張できる。

ここでプレシアが生きており、家族の情を回復させていれば、少々違った展開になっていたかもしれない。そうになっていた場合プレシアよりも主にフェイトの発言が変わる危険性があった。

そこまで解った上では流石に考えすぎかもしれないが、プレシアは最後の最後でフェイトを守る事が出来たようだ。

「喜ぶべき所では無かったな。情報を整理し、自分を肯定しようなどど……」

そこまで思考し、声に乗せ自分の浅ましさに苛立ちすら覚えた。

何が守る事が出来ただ！結局自分にはフェイトを救う事など出来はしなかったではないか！！

彼女が今笑っていられるのは、なのはとアルフが献身的に話しかけ

ていた事、さらに母親のあの最後の言葉があつたからだ。自分は何が出来た!?

アオイの頭の中で、ずっと繰り返される自問自答。

だが、それに返される答えも毎回同じだ、情報不足、解析不能。そんな時ですら機械的な事しか考えられない自分が酷く歪に感じた。やはり彼らとは違うのかと、人になる事など出来はしないのかと。すぐに頭を振って思考をキャンセルする。

少し離れた位置で、なのはとフェイトが手を振っていた。

どうやら、そちらに來いと言う事らしい。全力で大きく手を振るなのはとは対照的に、少し遠慮しながら手を振ってくるフェイト。

その二人の姿を見ながら、いつの間にか自然と笑みが口元に現れる。

(ああ、自分はここまで自然に笑えるのだな……)

嬉しい事実を認識しながら、彼は少し足早になのは達の元に向かった。

「あの、アオイさん。今回は何かと助けてくれて、ありがとうござい

います」

私は色々と話したい筈なのに、何も思い浮かばず、そんな言葉が口から出た。

でも、うん、間違ってない。これも言いたかったんだ。

私の言葉を聞いたアオイさんは一瞬驚いた顔を見ると、今度は悲しそうな顔を浮かべて私に問いかけた。

「自分は君を助けてなどいない。プレシア氏を助け切れず、フェイトの心を守れなかった。君が今ここで立っていられるのはなのはとアルフのおかげだろう」

母が亡くなった時、私は酷く落ち込んだ。母が亡くなったおかげで、私の罪は重くないと言うのも聞いてまた落ち込んだ。

それは間違っっていない。間違っではないが、アオイの言っている言葉には納得できなかった。

それはアオイさんのせいでは無い筈だ。言いたかった、伝えたかった。

だがうまく言葉が出ない。

生来、人と接する機会が少なかった私は、自分の気持ちを言葉で伝える事が得意ではなかった。

だから動いた。

彼を抱きしめた。

「私はあなたに助けられた、それはあなたが判断する事じゃなくて、

私が判断する事だと思えます」

少し頬が赤くなる。

少し大胆すぎただろうか。でも、体で喜びを表現するのは間違っていない。

アルフもそうだし。

「……だから、その、私は嬉しかったんです。貴方が私の為に体を張ってくれた事、私となのはの戦いを何もせずに只見ていてくれた事。誰かに守って貰う事とか、見守られる事とかなかったから、私にお兄ちゃんが出来たみたいで、その……嬉しかったんだ」

最後だけ、敬語で話すのをやめてみた。

少しシツクリくる。うん、良いかもしれない。

しばらくそうしていたら、頭に掛る冷たい感触があった。

アオイさんが手を頭の上に置いたのだ。

「ありがとう」

そう言った彼の顔は笑顔だ。

心が温まる。私や、母を必死で助けってくれようとした人。

優しくて、どこか子供っぽい人。

母に向ける感情とは違う気持ちで心で燦る。

解らないが、これは良い心地がする。

ああ、早くここに帰ってくれるといいな。この後に控える裁判などと言う物が既に苦ではなくなっていた。只々、この二人の元に戻ってきたい。
ただそれだけを抱き、彼女はアースラに乗って去っていく。
またいつか、三人で、仲よく会話の花を咲かせることが出来る事を祈って。

「くくくつはーはっはっはっはっはっ！面白！非常に面白い展開だ！！」

薄暗い研究室。

そこは脱走し、研究を続けるスカリエッティのアジトだ。
今日そこで行われているのは実験と言う名の観賞。

未だ自由に行き来する事が出来ない時間逆行するマシン、所謂タイムマシンだが、一度繋げた時間軸ならば、比較的簡単に映像を得る事が出来た。

そこで得られた衝撃の映像にスカリエッティは狂気の笑みをさらに大きくし、高笑いを浮かべた。

「人の感情を学んだか！実にすばらしい！……だが、目的を達成できないのは見過ごせないなあ？」

映像の向こうで、なのは達を見て笑っているアオイを見て、今度は表情を消した。

この落差はいつたどこから来るのだろうか。

笑い過ぎとも言える笑みから、無表情に変わるさまは可笑しいを通り越して不気味である。

「ファイア、ジーベン。来なさい」

スカリエッティに呼ばれ、暗い研究室の向こうから来たのは、女性と男性の二人。

それぞれに、数字が刻まれていた。ナンバーズと同じように。

「ドクター、ご命令を……」

ファイアと呼ばれた女性は片膝を付き、何かを敬う様に首を垂れる。

「キヒヒヒッ！？何だ何だ？出番かい！？」

ジーベンと呼ばれた男は女性とは真逆で、まったく敬う態度など見せずに、どこか狂ったように笑っていた。

「ああ、君たちにはこれから……、と言ってもまだ目途は立っていないが、幾つかやって貰いたい事がある。本来なら、すぐにでも取り掛かりたい所なんだが、最初とは違い、今度は二人を送るのでね、少々時間がかかる」

「キヒヒヒッ!? 面白れえことか? 親父い!!」

「ご命令とあれば……」

親父と呼び大声で何を言われるのか待ちきれない様子だ。

それとは態度こそ対照的だが、こちらもその発言を心待ちにしている。

二人の様子を見たスカリエツティは常と同じ狂った笑みを浮かべ宣言した。

「修理だよ、私の傑作のね? 無理ならば壊してくれても構わないよ。完全破壊せず、メモリーと体自体がこちらに戻ってくればね。そして、こちらが本命と言えるかもしれないあ! 闇の書の回収さ!!」

これより、僅かな時間を置き、複数の勢力が動きを見せ始める。何も知らないなのは達、自身達の主を守るために書を完成を目論む者達、それを促し、その先に何かを望む者達。

そして、それを横から掠め取るうとする者達。
事態は刻一刻と迫りつつあった。

起動記録17（後書き）

はい、ちょっと面白みに欠けるかもですが、これくらいが自分の限界と割り切っております。

さて、ここから日常を暫く書いて、A、S編に入る事となりますが、執筆速度はやはり著しく落ちる事になります。
待っていてやるよ！と快く言ってお下されると嬉しいです。

ではまたいずれ。

起動記録18「執事服と守護との出会い」(前書き)

お久しぶり振りでございます。

サブタイトルを付ける事にした。

センスは無いのであまり良いタイトルにならないと思うが、無いよりマシだろうと言う事で……

起動記録18 「執事服と守護との出会い」

八月も半ば、まだまだ暑い時期が続く、人々は短い服や薄手の服で厚さを誤魔化す季節。

その時期に、アオイもまた、いつもと違う服に身を包んでいた。それは季節とはまったく関係のない、見ていて暑そうな恰好であった。

「いらつしゃいませ、お嬢様。お席へご案内いたします」

喫茶・翠屋、現在満員御礼である。

その原因を作っているのが、昨日からウェ이터を始めたアオイだ。ピシツとした立ち姿、モデル並みの長身で着こなす綺麗なタキシードに、営業スマイルだが、その整った顔から繰り出されるそれに、女性客は目の保養とばかりに押しかけていた。

たった一日で、その場違いとも言える店員の噂は方々に飛び散り、予想以上に入った客に士郎と桃子は目を回していた。

全ては、桃子の何気ない一言から始まった。

「ウェ이터やらない？」

アオイが何か手伝いたいと士郎に申し出たところ、桃子が、アオイの容姿ならば客を寄せられると声をかけ、今の一言が飛び出した。士郎も、その考えに賛同し、アオイが自分から関わりを持つてくれた事に喜んでいた。

最初は士郎と同じ、エプロンを着て普通に接客するはずだったのだが、美由紀がそれではもつたないと言いつつ口を出し始め、翠屋のバイトまで駆り出され、何かが始動し始めたのだ。

士郎はその勢いに何も言う事が出来ず、ただアオイの無事を祈るのみだったとか……。

そして完成したのが、執事スタイルのアオイである。

美由紀の指導の下、接客に対する言葉使いを習得し冒頭のような話し方を使うようになった。

常識が少ないからか、アオイ本人も違和感なく、それどころか気に入っている節があるのが少し意外であった。

一日目、入って来たお客の反応は一瞬フリーズしていた程でインパクトは圧倒的だっただろう。

男性客にも問題なく接し、印象はそれ程悪くないだろう。

アオイはそつなく言われた事を間違える事なく完ぺきにこなす姿が、さらに女性客の琴線に触れ噂に拍車をかけていった。

初めて入って、オーダーミスなどが一切なく、案内、配膳も姿勢を乱す事無くとなれば、本物の執事を幻視しても可笑しくは無いのではないだろうか？

だが、そんな繁盛の中、二日目での盛況ぶりに一人面白くなさそうにビデオカメラを回している人間が居た。

「見えますか？アオイ君が仕事をしています。むう……。でもなんだか、あんまり面白くないの……」

なのはだ。

誰にも聞かれること無く、その言葉を漏らしたなのは、フェイトに送るビデオレターの面白い題材になると踏んで今こうしてビデオ

を回しているが、昨日以上の客と周りから向けられるアオイへの視線に、あまり機嫌が良くないようであった。

ある程度撮った後なのは店を後にした。

自分の分がまだの為、それをこの後撮るのだろう。

目端にそれを見たアオイは首を傾げていた。

撮られている事にも、撮りながら段々となのはの機嫌が悪くなっていったのも気が付いたがそれがなぜか全く解らなかったアオイは、とりあえず、勤務中であつたので無視をして仕事を続けた。

「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております、お嬢様」

黄色い声を上げ外に出て行くお客を見送り終わると、また仕事を続けようと視線を戻そうとしたのだが、僅かに感じる魔力と、この辺りではあまり見かけない髪色をした姿の女性を見つけ、そちらに視線を吸い寄せられた。

「……合致するデータがある？これは、守護騎士か？」

外に居るのは金髪をショートボブにしている綺麗な女性だった。

それは間違いなく「湖の騎士」と異名がつく守護騎士シヤマル。

アオイは自分の中にあるデータを読んでいく。

戦闘に特化したタイプの騎士ではないが、各種補助などの力は非常に優秀、彼女を後ろに控えさせた八神はやての戦力は侮りがたいものがある。必要であれば排除……。

「排除？待て、八神はやては護衛対象だ。その守護騎士の排除は不要、データ訂正」

データの修正を施していたら、シヤマルは翠屋のドアを潜った。丁度終わった所であった為、職務を全うしようと営業スマイルを浮かべた。

「いらつしやいませ、お嬢様」

「え？あ、はい、ケーキのお持ち帰りを

」

作業をしながら、アオイはこの後の事を考え始めていた。

自分は探知系の能力が乏しい、その為、今まではやての所在を知る事が出来なかった。

この守護騎士に事情を話し、はやての所在を知る事が出来るのではないか。

(しかし、なのはもフェイトもデータにある物と若干違いがあるようだし、八神はやても……)

アオイの危惧は、今までの情報の不一致だ。

後を着けると言うのは却下しておきたい。ばれば、友好的な関係ではいられなくなる、其れでは守る事が出来ない場合が発生する可能性も否定できない。

どちらにしても、所在が分からなければどうしようもないのだが。

「ありがとうございます。またお越しくださいます、お嬢様」

見送った後、アオイは桃子と士郎に事情を話し、仕事をそのまま上げさせてもらう事になった。

バイトの子が「是非是非」と二人を説得してくれたが、アオイにはなぜかは解らなかった。

「お待ちください、お嬢様」

仕事着のまま走って追いかけてきたアオイはどのように声をかけて良いのか逡巡した後、自分の中で一番シツカリしている丁寧語で話しかけた。

前を歩いていたシャマルは一瞬つんのめり、暫く何の事か解らないようだったが、自分がそう呼ばれている時が付くと、顔を赤くし直ぐにアオイを止めさせた。

「……何なんですか？ いったい。あんな恥ずかしい事やって……」

アオイには何が恥ずかしい事だが、いまいち理解できていないが、自分の用件を口にした。

口調は先程止められたので常と同じ、ストレートなものにかわる。

「八神はやてと会いたい。連れて行ってくれ」

瞬間、シャマルの顔が引きつった。

シャマルはハッ、と気が付くとその場から一步跳躍し距離を取った。さらに念話を発動させたのか、微弱な魔力の発動を感知したアオイ。その場で動きを止める両者に、周りからは奇異の目を向けられる。

「……ここでは人目が付きます。ついて来てください」

「了解した」

シャマルの口ぶりからは、はやての下に連れて行ってくれないようだが、話しだけは聞いてくれるようである。

アオイは先導されながら、その場から移動を開始した。

向かっている方角から、今から行く所はどうやら公園のようだが、近づくにつれいくつか魔力を検知した

アオイはその方角から感じる魔力をデータの中から探す。

だが、それは深く探すことも無くすぐに見つかった。

シャマルと同じ守護騎士、他の二名がその場に会しているようだ。

おそらくはシャマルが呼んだのだろうが、アオイにとっては逆に有難い。

説明する手間が省ける。

結局の所、彼らが居る限り、アオイの出番は無いのだが、それでも任務としてある以上、どのような繋がりであっても作っておく必要がある。

「貴様がそうか……」

公園に着き、初めに声を出したのは、ピンクの髪をポニーテイルで結っている女性シグナムだった。

その傍らには赤い服に身を包んでいる少女ヴィータが居た。守護獣ザフィーラが居ないのはおそらく護衛に一人残してきた結果だろう。そして、シャマルは彼らの下に歩み寄ると、結界を発動させた。

複数である可能性を考慮に入れ、外に話が漏れないようにしたのだ。

「自分はアオイ。あなた方については既に知っているので自己紹介は不要だ。自分はとある事情で八神はやてを守護する任務を帯びて

いる。故に、八神はやての住居に連れて行ってほしい」

「その必要はない。主には我らが着いている。他の者を近づけるつもりは無い」

アオイの発言をバツサリ切って捨てたシグナムは逆にアオイに向けて質問を投げかけた。

「貴様はどこで主の事を知った？いや、貴様に命令を下した人間は我らを如何するつもりだ？」

至極当然な質問だ。

彼らがこの世界に現界してから、それほどの時間は立っていない。しかも今回は主はまるで欲が無いので、まったくと言って良い程、書の完成と言う本来の活動をしていない。なのに調べが付いていると言うのは捨て置けるものではない。

「不明だ。……自分も誰がこの命令を指示したか解らない」

「なに？」

アオイは自分の状態を包み隠さず口にした。

自分がある一定の情報以外の記憶が無い事、その期間の間、先ほどの店の店主の家にお邪魔している事など、アオイ自身についてはほぼ全てだと言っても良い。

「……貴様の話全部を信じたわけではないが、事情を知っている人間をこのまま野放しにしているわけにもいかない」

「そうね。最低でも、しばらくは私たちが監視で付く必要があるか

しら」

「ここでやっちまえば良いじゃんか」

「それで騒ぎが起これば、私たちの事がもっと多くの人間の耳に入るぞ」

信用はしない。

だが徹底抗戦するような事もできない。

アオイはまだ知る由もないが、はやては車椅子生活であり、魔法に關しても軽くシグナム達から聞いた程度の知識しかないのだ。

大きな事態にでもなれば、移動もままならなく、戦闘も出来ないはやてではすぐに捕まる。

それにはやては、そういう事態そのものをシグナム達に禁止していた。

「了解した。ならば、定期報告のみして貰えば、自分は八神はやてとの接触を控えよう。緊急時のみ、呼んでもらえれば駆け付ける事にする」

「……そう、か。そうだな。ならば、一週間に一度、この公園で。

時間は今と同じ。貴様以外の人間が来た場合、裏切りと判断し、攻撃も持さない」

「了解した。では、今日はこれで失礼する。仕事が残っている」

アオイはその場から去って行くが、後ろから刺さる視線は彼女らの姿が見えなくなるまで消える事は無かった。

あれから一週間。

「桃子。ケーキをいくつか見繕ってほしい」

「あら？どなたにあげるの？」

「……あの時の女性の家族だ。今日会う約束をしている」

「あらあら、アオイ君も隅に置けないわね。それで幾つかしら？」

アオイは頭の中で数を数える。

「七つだ。一人を除いて女性なので、人気がある物を」

はやての家で生活をしているのは五名。

はやて、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラの五名。

だが、アオイが思い違いをしているわけではない。アオイの中では、彼らは七人である。

彼のデータにあって、今現実として存在していない二名。融合騎リ
インフォースとアギトの二名。

彼がその間違いに気付くのは、もう少し後の話である。

起動記録19「お菓子修行と大きな矛盾」(前書き)

連投!

「　　っ！んんっ！！」

なのはが暴れる。

「はいはい、なのは？大人しくしてようね？」

「んむぐツ！？　　……」

手刀でなのはを眠らせた美由紀。

少し過剰なスキンシップであるが、家族である美由紀がなのはをどうにかする筈がないので、気にしながらもまた無視をした。

アオイとしては、どんな事でもそれが良い経験になるのであれば、一度は必ず試しているだけだ。

少し前などは、短期のバイトなどをしていた事すらあった。

接客のバイトなどもして最近は少しだけ、愛想が良くなったとか、ならなかったとか。

「それじゃ、明日から早速やっていきましょ。最低でも、次にその人と会う時までには一品ぐらい渡してあげたいわね？」

昨日会ったばかりなので、次に会うまでまだ一週間ある。

それまでにはいくらか形にはなっているだろう。

アオイは了承し、それに桃子がかなり張り切っていた。

そして一週間後の定期報告の場で、アオイはいつもと違い自作のデザートを持ってきていた。

「と言う訳で作ってみた。持って帰り感想を次回の報告の時に頼む」

「……何がと言う訳なのか解らないけど、いつもお見上げ貰っちゃって悪いわ」

「今回は実益も兼ねている、問題ない。多くの人間に味わって貰えれば上達が早いらしい」

「なんだ。今日はケーキじゃねえのか」

「ああ、今日は自作のプリンだ。ケーキを作るのはさすがに早いと言われたのでこうなった」

この場にはシャマルとヴィータの二人が居たが、報告の場には必ず二人が顔を出すので、特に問題なく進化した。

ヴィータが少しだけだがプリンと聞いて顔を明るくしていた。見た目とたがわず、甘いものに目が無いのだろう。

「そうね。……それなら、今度は明後日あたりでどうかしら？こう言うのは早い方が良いでしょう？」

「それはこちらとしては助かるが、そちらにメリットが無い。本来は報告だけの関係の維持だったはずだ」

「……毎回ケーキを持って来るあなたがそれを言うとは思わなかったわ」

シャルマルは少しだけだが呆れていた。

彼女の中では、既にアオイは少し抜けた青年、と言う判断がされていた。

自分の言葉に首を傾げる彼を見て、シャルマルは小さく口元を押さえ笑っていた。

実ははやてからはケーキ兄さんなどと家で呼んでいるが、一度も顔を見た事が無いアオイが知る事は無い。

「それじゃよ、アイスとかも作れんのか？」

「ああ、プロからの教授を受けているから菓子を専門に作るつもりだ。次当たりはアイスにしよう」

桃子が直接指導を行っているので菓子が出来に関しては期待できるものが出来るだろう。

アオイの言葉を聞いたヴィータはアオイに渡されたプリンの入った箱を持ちながら、小さくガッツポーズを取るのだった。

中に入っているのは七つのプリン。

最初は不思議がっていた八神家の面々だが、ヴィータが欲しがり、はやてが欲しがり、結果丁度いい数になったので何も言わなくなっていた。

「プリンも作り方は簡単だが、奥が深いようだ。これはいい経験になるかもしれない」

「……何を目指してるの？」

その後、いくつかの会話を交わし、それぞれの家に帰っていく。

「ただいまああ　！」

「如何したんや、ヴィータ？そんな嬉しそうにして……」

「はやて、見てくれッ！今日はプリンだッ！」

「へ？ケーキ違うん？」

何度もケーキを渡されている八神家では既にケーキの兄さんで定着しているのだ。

故に、こうして違う物が来たことで少しの驚きを得たのだ。

「そうなんです。どうもプロの方に教えを受け始めたみたいで、その試作を家で食べて感想をくれ、だそうです」

「そんなんでええの？材料費とか……」

「実益を兼ねているから良いと。ケーキの時からお金の事を考えない人でしたからね。それにしても、貰ってばかりと言うのもあれなので何かお返しを考えなくちゃですね」

二人でお返しを考えている所で、ヴィータがプリンを食べながら、ずっとはしゃいでいた。

「次はアイスだつてっ！何味作んだろ！？」

あまりのはしゃぎように驚いてしまう。

そんなに気に入ったのか、にこにこして頬を染めていた。

「完全に餌付けされとるな……」

「そうですね……」

あれから何度か会い、親交を深めたが、未だにはやてと会う事が出来ていない。

それに関しては既に決まりが出来ているので不満は無いが、最近守護騎士たちの動きが可笑しい事に気が付いた。

肌寒さが目立つ季節、人々が一枚着重ね始めるそんな時期から、彼ら守護騎士と会話をする機会が減っていった。

何故かは解らない。

だが、どこか焦りのような物を感じさせながら、忙しく動き回っている。

「菓子は難しいな。上手く行かない……」

が、それでも理由を問いたただす事などできず、次に渡すデザートに凝り始めていた。

自宅の方にはお菓子関連の本が幾つかあるが、それでも足りないものがあるので、今こうして図書館まで足を運んでいた。今まで指示されたとおりに出来ていた事が、お菓子作りになった途端に出来なくなってしまうた。機械的にやって来た事とは違い、繊細であるお菓子は少しの違いで大きく味を変えてしまう様なのだ。ここまで来ると、アオイにとってお菓子作りは趣味になっていた。目標は桃子の味に追いつく事だ。

「……ん？アレは」

アオイが菓子関連の本を隅から隅まで読んでいた時の事。車椅子で移動する少女に目が行った。

と言つのも、僅かに感じる彼女から伝わる魔力が、どこかで知っているような気がしたからだ。

「僅かにだが、八神はやての波長と同じものか？しかし、圧倒的に魔力量などが違い過ぎる。……人違い、か」

データの中にあつた物と質が同じ魔力の波長。

しかし、圧倒的に量が足りない。

またデータの間違いか、と訂正を入れていこうとした。

だが、それを行う元となる者がいないので断念し、丁度本を読み終わったので、本を取ろうと精一杯手を伸ばしている少女に歩み寄っていく。

「これだな。届かない場合は司書に伝えるといい。彼らの仕事だ」

「ああ、ありがとうございます。……あ、お兄さん、お菓子に興味あるんですか？」

訛りを感じる喋り方でアオイが持つ洋菓子の本に視線が移る。それはアオイが読み終わり戻す為に持っていた本だが、彼女にとっては最近触れる機会が何かと多いのでつい話しかけてしまっただけだった。

「ああ、どうやら作るのが趣味になったようだ。趣味と言う体験は無かったが、なかなか面白い」

「へー、自分で作ってらっしゃるんですか。そう言えば私の家にも、最近パーティシエさんに弟子入りした人からの差し入れが多いんです。私はその人知らんですけど、とっても美味しいんです」

「ほう、参考にしたいな」

まさか自分が作っている等と知る筈が無いアオイはまだ見ぬそのお菓子の期待を持っていた。

「ええですよ？今取って貰ったお礼に家にある貰いもん、一個差し上げますよ。あ、でもその人に悪いやるか」

ちよつと待つてくれと、携帯を出したはやてはどこかに電話をかけた。笑い声が聞こえるところから、おそらく家の人間にかけているのだらう。

その人物から貰った本人に大丈夫かどうか聞いているようだ。

少しして電話を終わらせて戻って来たはやてだが、その顔は何処か嬉しそうだ。

「ええみたいです。その作った人がたくさん意見を貰いたいって言

つてたらしいんで、食べた感想なんかもらえたらOKです！」

「いや、いきなり見ず知らずの人間にそこまでする必要はない。何かあってからでは遅いぞ？」

矢継ぎ早に話が進むのでつい忘れてしまいが、彼女とは会って数分だ。

そんな簡単にそう言った行為をするのは褒められる事ではない。

「ええやないですか。親切して貰ったら返さな。それにそういう事する人やつたら、そもそも私を助けたりせやしません」

アオイは常識を言っているのだが、この少女はどうやら押しが強いようだ。

アオイはこういう押しが強い女性にとても弱い。
なのはしかり、桃子しかり。

理屈では無い押しの強さは対応に困ってしまう。

「……では、一つただごと」

「もう持って来て貰うように言ってるんで、家の迎えが来たら渡せます」

対応が早い。

やはり押しの強さはかなりの物だ。

なのは以上桃子以下だろうか？

暫く会話をしてこの少女がはやてだと自己紹介をする前にシャマルが着き、お互いに沈黙したのは言うまでもない。

「自分は無実だ」

とりあえず言ってみたアオイ。

まったくはやて本人であると気が付かず、それどころか除外検討していたのに、若干の罪の意識を感じていた。

シャマルはアオイの傍らにある本に視線を向けると、偶然であると言う事を理解してくれたのか、深いため息を付いた。

「どうしたん、シャマル？このお兄さんと知り合いなん？」

「知り合いも何も、この人がお菓子の兄さんですよ？はやてちゃん」

説明を受けたはやては驚き、偶然と言う物に感心していた。

それにはアオイもシャマルも同意した。

「ほな、これどないしょ？」

流石に作った本人に感想も何もないので、それははやての家に送還される事となった。

外に出してしまったので、家に帰ったらすぐに食べると言う。

家にも誘われたが、さすがにそれは契約違反も良い所だ。

ここまで来て今更と言う感じだが、そこはしっかりとかりとけじめを付けなければならぬと言う事で遠慮をしておいた。

はやてたちと別れた帰り道。

アオイは久方ぶりに感じる、自身の頭の熱に魘されていた。

「……クッ！どうなっている？八神はやては決定的だ。これはデータの打ち間違いや、ちよつとした手違いと言つ範圍を超えているッ
！！」

人気のない道を歩きながら、アオイは吼えた。

「……これは埋没しているデータの回収と時系列毎に調査をする必要があるか。クソッ、どれほど掛る？一か月掛らなければいいが……」

嫌な予感がする等と、機械らしくない感覚に囚われアオイはその調査を早急に行い始めた。

それは十一月の終盤に差し掛かっている時期だった……

起動記録20「動き出す勢力と困惑する時系列」

「父様、これがアイツのデータです」

「ふむ……」

ある一室にて、ギル・グレアムは自身の使い魔に持って来させたデータに目を通していた。

そこに書かれているのは、半年ほど前に解決したプレシア事件とアオイ個人に関するデータだった。

「八月ごろから接触をしています。奴は守護騎士の存在を初めから知っていたようですし、危険性はかなり高いかと……」

双子の使い魔は、グレアムの後ろに控え、次の指示を待っているようだった。

「……今更計画の断念は考えられない。デュランダルも完成している。彼が計画の邪魔になるなら……、排除も止む無いか」

グレアムは皺を濃くし、苦痛に耐えているようだった。

小さな少女を犠牲にする計画。

天涯孤独の少女に乗り移った闇の書を発見したグレアムはその少女を犠牲にする方法で多くの悲しみを無くそうと計画を進めてきた。罪深い事と知りながら、それでも、一人の犠牲で大勢の命が救われるならと、己の感情を排してきたつもりだったが、いざ、邪魔者が増えた時の排除に躊躇いを見せてしまう。

「はい、私たちが消してきます。……クライド君の様な事が二度と

ないように計画が完遂されるまで」

グレアムの悲しみが流れているのか、二人の使い魔もまた、悲しげな表情を見せるが、確固たる決意を抱き、アオイの排除に動き出すとしていた。

『け、ケケケケツ！ヒヤツハハハハッ！！止めとけ止めとけ、お前ら如きじゃ、奴は止められねえぜ！？よくて手傷を負わせるくらいじゃねえの！？ひやははハハハッ！！』

「なッ！？だ、誰だ！？」

室内に響き渡る大音量の狂った笑い声。

ここは自分たちが結界を強固に張り巡らせていたはずなのに、全く感知できないばかりか、こちらが相手を把握できないでいる事に、リーゼ姉妹は驚き、表情を険しくさせていた。

『我らはあなた方に協力するために来ました』

今度は機械的に物事を進めようとする女性の声だった。

「協力とは？」

『さっすが爺さんっ！話がはええな。その二匹と違ってよく状況を理解していらっしやる！ヒヤハはハッ！！』

『簡単な事です。闇の書の封印をお手伝いする、と言う事です。もつと言えば、機械人形の相手は我らに譲っていただきたいと』

「貴様らみたいな姿も見せない奴の事なんか、信用できると思って

るのかッ!？」

「そうだな、協力と言うのなら、最低でも姿を見せて貰わなければ、信用できない」

使い魔の言葉を補足するグラム。

それに対して侵入者はしばらくの沈黙の後、目の前に姿を現した。

「これで満足いただけましたか？」

「これ以上ごねるなら、殺しちまうぞ？ヒヤハはハッ!？」

現れた男女二名の侵入者。

魔力を持たないようでも何も感じられないが、魔力の無い人間が、自分達の結界を感知されずに突破した事に驚きを隠せに無いでいた。

「君たちの目的は……?」

「教えるだけでも?」

「……………」

殺気が部屋に充満する。

その殺気を面白がるように、男がさらに大きい声で笑い出した。

グラムはこの二人を信用できる筈が無いと考えながらも、未知数の敵に何かを仕掛けられるほど、蛮勇では無かった。

それを察したのか、女性の方がグラムに向かい囁いた。

「我らも、闇の書には完成して貰わなければならないのですよ。それには人形が邪魔。違いますか？」

その通りだ。

どう言う理由かは解らないが、アオイははやての味方をするような動きを見せている。

彼もまた、その実力が未知数であるので、強硬策は最終手段の様な物だった。

彼の相手をしている二人の力を分析すれば、少なからず、対抗策を講じられるくらいにはデータが集まるだろう。

この場で衝突するよりはましであるし、下手をすれば、犯罪紛いの行為が露見する事に繋がりがねないのだから。

「……解った。協力を要請しよう」

「「父様っ!?!」」

「聡明な方で助かります。では我らは失礼させていただきます。行くぞ、ジーベン」

「命令すんじゃねーよっ!んじゃまたな、子猫さん達よ、ヒヤハはハッ!」

二人はまた、来た時と同じように消えて行った。

魔法で追尾しようにも、痕跡すら残されていなかった。

「……はあ」

グレアムの溜息に、リーゼ姉妹は仕方が無かったとは言え、あんな連中に協力をしなければならなかった事態に歯噛みしていた。

「……あの二人の狙いが闇の書だと言うのは解っているんだ。どの

よ用に使うか解らないが、完成したら、彼らよりも早く書を封印すればいい。……もしもの時は私が封印する。二人にはあの二人を止めてもらうしかない」

「はい、私たちは父様の為に……」

「面倒だなあ？俺たちが完成させちゃまずいのかあ？」

「我らには蒐集できないでしょう。自分のスペックすら理解できないほどあなたは欠陥品なのですか？」

「ヒヤハははハッ！いいね、奴らをやる前にオマエを消してやろうか？ヒヤッハ！」

「遠慮しましょう。……これで人形さえ我らで封じれば、闇の書が完成するまで歴史通りに事は進みます。完成した所で我らが介入し、回収。そのまま帰還して任務の完了です」

「はははっ！いつやるんだ？あの欠陥品の片づけをッ……」

「直ぐにでも。既に一月を切っています。奴が介入し変化が起こる前に私たちで処理します。……最初に言っておきます、彼を処分するのはデータの修復が不可能と判断したときか、抵抗された時のみです」

「つまらねえな？俺の遊び相手になるのはお前か奴位だと思うんだがな？」

「遊びで戦うのは止めなさい。我らが戦えば、どちらかが半壊はします。こちらでは最低限の修復しか効かないのです、欠損は直せません」

彼らは闇の中に消えていく。

向かうのはアオイが居る鳴海市。

此処までの時間を要してしまったのは時間跳躍の調整に難航したからだが、間に合ったので問題ない。

彼らに課せられた任務はアオイの修復、または破壊。

第二に闇の書に回収。

第三に、アオイが修復が不可能であった場合、代わりに高町なのは、フェイト・テストロッサ、八神はやての抹殺である。

まず彼らは優先順位通りにアオイとの接触を開始する。

アオイと言えば……

「桃子。このクリームはこれくらいで良いだろうか？」

ケーキを作っていた。

「あら！いつも以上にいい出来ね？調べ物が上手く行ってるのかしら？」

「逆だな。上手く進まないのです、気晴らしにこうして作っている。最近はどうしていないと落ち着かない」

気晴らしなどが必要になるほど、彼の心は成長している。

「もうすぐクリスマスだものね？それまでには美味しいケーキを作るようになりたいのかしら？」

アオイの調べ物は難航していた。

いや、難航していると言うよりは困惑していると言う方が正しい。人物たちの細かいデータを回収し、復元、其れの履歴を調べ上げる。そこから時系列通りに並べ、アオイが抱いている疑問を解消しようとしているが、年齢そのものが合わなくなって来ていた。調べれば調べるほど、辻褄が合わなくなっていったのだ。

虫食いだらけの情報だが、それをパズルのピースのように慎重に整えていくと未来でしか知りえない様な事まで出始めていた。

なぜ今までここまで調べなかったのかを疑いたくなるような事実ばかりで、アオイは大人しくしていられなかった。落ち着き、調べる事が出来るように、お菓子を作り、集中していく。

「アオイ君っ！また作ってるの？なのはも食べたいな」

もうすぐ完成と言う所で、なのはがアオイの様子を見に来ていた。いつも顔を合わせているが、最近は危険が無い事で、なのはを蔑にしていたかもしれない。

アオイはなのはを見て、作り上げたケーキにチョコレートで何かを書き始めた。

「なのは、君に渡そう」

「やったッ！…… ツ！？これ貰って良いの？」

「ああ、しかし、一人では多すぎるのでみんなで食べるといい」

チョコで書かれたメッセージは「大切な人へ……」と言う物だった。これは作ってあげる側が正常ならば、まったく赤面ものだが、アオイはそう言った事には無頓着であり、本心をそのまま形にすただけであった。

なのはは赤面しながらも、嬉しそうにそれを受け取り、幸せそうに笑っていた。

「後二つは作らなければな」

「後二つ？」

「フェイトの分と知り合いの分だ。同じものを作って味を確かめて

貰わないと……」

「……」

なのはの機嫌がみるみる悪くなっていく。

なのははアオイを一発だけ殴り、走って逃げって行った。

アオイは決して痛くないその拳を受けて、また機嫌が悪くなったなのはに首を傾げていたが、その一連の行動を見ていた桃子は肩を震わせて笑っていた。

起動記録20「動き出す勢力と困惑する時系列」(後書き)

とりあえず連投終了。

書き溜めていたと言うか、仕事などでメンタルがかなり貧弱になって来たので、これでいいのか数十回と悩み投稿w

感想お待ちしてます。時間は相変わらずないので、返事を書けるかは微妙ですが(汗)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5299p/>

魔法少女リリカルなのは～未来の守護機士

2011年10月10日11時39分発行